

町民参加の町史づくり



第37号

2016年3月31日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

TEL (0980) 82-6191

# 目 次

第33回竹富町史編集委員会開催	1
『竹富町史 第六巻 鳩間島』書評集	3
波照間島に関する資料	7
2015年度地域史協議会報告	30
波照間島のミョウクチエ	32
イリオモテヤマネコ新聞記事表題一覧	33
2015年度受贈図書一覧	39
竹富町史編集係2015年度業務日誌	43
波照間島小学校沿革誌	45
竹富町史の刊行物一覧	52
編集後記	53

## 表紙の写真

2016年2月8日の黒島旧正月の模様である。東筋集落の伝統芸能館前には北に「雪丸頭」(旗文字は「瑞祥」)、南に「朝日頭」(旗文字は「天祐」)の2本が堂々と立っている。法被を着た人々が北と南にわかれ太鼓とドラにあわせて《正月ユンタ》をうたい幕があけた。うたい終わると北から鎌を持った武者と南からは槍を持った武者がそれぞれ板台に乗って現れた。板台は中央で組み合わされ勇壮な棒術が披露された。両者が分かれると、そのまま綱引きへと移り、掛け声とともに参加者全員で綱を引き合った。今年は南の勝利であった。続いて北から弥勒加那志が長い鬚を垂らした長者と稚児2人を連れて板台の上に現れた。同じく南からは赤い帕の筑登之が稚児2人を伴って現れ、弥勒加那志から五穀の種子を受けられ、今年の豊年満作、無病息災、子孫繁栄が約束された。

# 第33回竹富町史編集委員会開催

第33回竹富町史編集委員会が2015年12月4日（金）竹富町役場2階委員会室にて次の日程で開催された。

- |                      |      |
|----------------------|------|
| (1) 竹富町教育委員会教育長あいさつ  | 大田綾子 |
| (2) 竹富町史編集委員会委員長あいさつ | 石垣久雄 |
| (3) 経過報告             | 事務局  |

## 第33回竹富町史編集委員会

### 議題

- (1) 発刊計画について
- (2) 「島じま編」（波照間、西表、黒島）の進捗状況について
- (3) 町史編集事業においての課題（竹富、小浜、新城、鳩間）
- (4) 小委員会について
  - ①自然編について
  - ②前近代編について
  - ③郷友会編について
  - ④言語編について
- (5) 『竹富町史だより』について
- (6) その他

出欠は以下のとおりである。



出席者 14人

(石垣久雄・里井洋一・新本光孝・石垣金星・上江洲儀正・大浜修・黒島精耕・玉城功一  
通事孝作・西里喜行・玻座真武・花井正光・本田昭正・吉川安一)

欠席者 4人

(大城肇・狩俣恵一・鳩間真英・三木健)

大田綾子教育長から「町史編集事業の島じま編において竹富、小浜、新城、鳩間の町史が出版されておりますが、島ごとに個性豊かな歴史文化が刻まれており、その文化遺産を保存し、後世に継承している町史編集事業は大きな意義があると思っております。今後も予定通り竹富町史が発刊できることを期待しております」と挨拶があった。

続いて竹富町史編集委員長の石垣久雄が「町史編集委員の努力と協力を受けて精一杯頑張っております。立派な竹富町史が編集できるように、今日一日委員の皆様のご協力をお願いいたします」と述べた。

その後、事務局から業務経過報告と故阿佐伊孫良氏の補充として沖縄国際大学副学長の狩俣恵一氏

が委員に加わったことが報告された。

#### 議題（1）発刊計画について

波照間島編専門部会から執筆者の原稿の提出が遅れており、校正の段階にもいたっておらず、今年度の『波照間島編』の発刊を見送ったことが報告された。その結果、発刊計画が変更され『波照間島編』は2016年度の発刊にずれ込み、続いて『西表島　近代開拓編』、『西表島　歴史・民俗編』、『黒島編』の順で各年刊行することが決定された。

#### 議題（2）「島じま編」の進捗状況について

##### （3）町史編集事業においての課題

未発刊の各島編の章立てと原稿の執筆状況が確認され、発刊に向けての見通しについて確認がなされた。既に発刊された島じま編の中から、在庫がなくなった場合の復刻版や再版についての問題や著作権などについて議論された。また編集委員会で編んだ町史の内容が島の宝として周知できるよう、史跡や名勝などについて案内板や説明版の設置を関係各所に要望することになった。さらに、既刊の島じま編の活用を促進するため、シンポジウムを開催させる提案などがあった。

#### 議題（4）小委員会について

「資料編　新聞集成」は隨時入力作業を行い、「前近代編」は専門部会を開き宮良用庸家文書や竹富町独自の古文書から翻刻していくこととなった。

「郷友会編」は沖縄本島で今年発足した在沖竹富町郷友会連合や本土に組織される各郷友会の事務局とも連絡をとりながら、狩俣恵一委員が中心となり進めていくことと決まった。

「自然編」は前回の委員会で承認されたとおり、写真を中心としたビジュアル版と沖縄県史を参考にした自然環境版の2冊を刊行することとなった。また、自然災害史なども盛り込み、各島々の特徴を表わした内容にすることが確認された。

「言語編」については小委員会も作られていない現状だが、県全体で島言葉を見直そうとの気運が高まっているので、行政当局と連携して取り組んでいくことと決定した。

#### 議題（5）『竹富町史だより』について

『竹富町史だより』をB5版の縦書きからA4版の横書きにし、年1回から年2回の刊行へと拡大していきたいと委員会に提案し承認された。

# 『竹富町史 第六巻 島間島』書評集

『竹富町史第六巻 島間島』の編集・発刊によせて  
一島間世ぬ直らば・友利世ぬ穏らば一

得能壽美

昨年3月、本紙に『竹富町史 第五巻 新城島』の紹介記事を掲載していただき、今回は『竹富町史第六巻 島間島』の紹介。同書は、今年3月末の刊行、B5版、700頁超え（価格3000円+税）。竹富町史編集委員会は、順調に編集・刊行事業を進めている。

『島間島』の編集にあたった専門部会は、吉川安一先生を部会長に、加治工真市・島袋憲一・吉川英治・大城肇の各先生が委員を勤められた。加えて執筆者として、大城公男・大城學・大山了己・加治工尚子・大工義紀・通事孝作・西原啓栄・島間可奈子・屋嘉武雄・飯田泰彦の各氏。これを人材といえるのである。

目次立ての基本は、ほかの島じまと同じであり、一見、没個性のようだが、これは島じまと同一レベルで比較することができ、むしろ個性が際立ってくるといえる。その本書の個性は、第5章「人と暮らし」、第6章「祭祀と歌謡」、第7章「人生儀礼」、第8章「民間伝承」、第12章「島間島の方言」あたりにあることは、人材（執筆者）の個性からみて当然といえるだろう。

評者は歴史の研究者であり、自身の研究にとって、もっとも重要なことを、島間島で検証した。近代よりも前に八重山の島々の人々にとって、村や島を超えて耕作をする通耕こそが、その生活の基盤であったということである（拙著『近世八重山の民衆生活史』64-74頁をご覧いただきたい）。本書によって、書き加えることは多い。

本書第2章第1節「自然と地名」で、島と周辺海域の詳細な地名が掲げられるが（52頁）、これは加治工真市氏の研究成果による。そして「西表島北部域の地名」が、同様に詳細をきわめて掲載される（60-61頁）。この地図は、加治工氏と小

濱光次郎氏『島間島隨想』から作成されている。そのなかで、たとえば、アーラバカには島間島の米盛・西原・東里・小浜など各家の水田があり、インダでは毎年旧暦9月に島牛牧組合による祈願があったなど、島間島の人々がかかわった西表島の地図が落とされ、解説されている。

まさに通耕というキーワードによって解かれる島間島の歴史を物語る地名である。

第3章「歴史と伝承」では、第7節までの前近代は他の島々と同一のフォーマットで描かれる。しかし、たとえば、「古見村の所轄下にあった時代に、古見村から島間島に移住した家系には大城家、東里家、友利家、通事家、小濱家、與那田家などがあった」という記述は（111頁）、「島間島出身の長老・屋嘉武雄（1925年生）の資料メモによる」と注されている。歴史と伝承が織りなす島の歴史を語るのにふさわしい内容である。

そして、大きな島から小さな島に移住する理由を考えるのは、興味深いテーマである。

第3章第8節「琉球処分前後の島間島」では、「八重山島管内宮良間切島間島巡査統計誌」が使用されている（128-132頁）。この「統計誌」は田代安定の資料で、八重山の全域にわたって村ごとに編纂され、それが残っていることが確認されているが、台湾大学に所蔵されるものが大半であり、広く公開するための準備が進められているという。現状では、島間島と石垣島大川村・西表島仲間村の分が東京の資料館にあり、複製本が八重山博物館などにある。内容は一村ごとに詳細をきわめており、この資料がいかに重要なものであるかがわかる。

明治以降は新聞を有効に活用して、島の歴史を記述している。また体験記などもまじえて沖縄戦の様子が描かれ、「全戦没者名簿」がまとめられ、戦死の状況などが記述される（149-158頁）。

島間島の教育では、島間校の存続について、多くの頁を割いており、1982年から2011年までの「島

間小中学校の年別転入生状況」(225-227頁)、1896年から2014年までの「鳩間小学校と中学校の児童生徒数」(232-233頁)という表が作成されている。島の未来を考えるうえで、貴重な資料である。

その後に、最年少の鳩間可奈子のコラムがある(234頁)。中学校と島での生活を生き生きと描いており、ほとんどの世代が懐かしさを感じるだろう。そして、「人間一人の力の大きさ、自然と向き合う楽しさと厳しさ、それらを島で実感することができた。小さな楽園がここにある。それを世界に知らしめんと、これからもうたっていこうと思う」と歌い上げる。彼女もまた島の人材である。それに続く「1980年前後の鳩間青年会」(241-245頁)も、島の人材が育った証言である。

第5章「人と暮らし」では、第1節「社会生活」で屋号、人間関係(親族語彙)、島の時間観念が、加治工真市氏によって豊かな方言とともに記述される。とくに島の時間観念は(264-266頁)、方言とその観念図をもとに、島の生活のありかた、リズムを教えてくれる。百姓の労働時間について王府の命令は厳しいが、実態をアサカイとヨーコイの事例が教えてくれる。「アサカイヌ ウチナーパタキ カイシ クーディー」(朝陰の涼しい内に畑を耕して来ようよ)、「ヨーコイ ナラバル パタケー バラリ」(炎暑が緩んで夕影になつたらばこそ畑には行けるのだ)。そして、「マープスマバーキ シグトゥ スープソー プリムヌ」なのだ。

第2節「暮らしのなかの道具」では、衣食住と生業にかかる道具が方言、解説とともに、すべての項目に写真よりもわかりやすい絵で示されている。屋嘉武雄・吉川安一両氏がまとめ、絵を寄合英名氏、方言表記を加治工真市氏が担当し、伝承者のお話を加えて、楽しい成果を人材のコラボによってもらっている(267-282頁)。一方で、第6章「祭祀と歌謡」は、大城學氏の独壇場である。氏は、この分野において第一人者であるのみならず、その編著書は「世界へ拓く研究」と評価されている。と、思ったら、同章第12節に「豊年

祭の儀式進行図」という項があった(371-397頁)。前の世代と次の世代をつなぐこの作業は、屋嘉武雄氏の労作である。儀式の進行に合わせて、神人や大旗などの配置と移動が、56枚の図で示されている。これも、写真よりわかりやすく、記録としての価値も高く、本書でもっとも注目できる成果のひとつである。

このあたりの記述には出典の注があまりなく、執筆者が調査したオリジナルな資料が出されているようだ。第7章「人生儀礼」、第8章「民間伝承」から、第12章「鳩間島の方言」も同様で、とりわけ第12章はこれだけで単行本にしてもよいほどの内容ではないだろうか。

さて、先述したような評者の興味からいえば、第9章「生業・産業」、第10章「交通・交易・通信」に目が行く。農業、畜産、養蚕・織物は大城肇氏の担当で、通耕による生活を描いている。漁業は大山了己氏による。豊富な図もあって、複合生業の豊かさをみせてくれる。

第14章「人物」は、屋嘉氏の原稿をもとに、島出身の方々が資料をもちより、多くの先輩がたの業績を讃えている。「球陽」などの歴史史料にみられる人物も取り上げられている。

鳩間島は、本書が編集・刊行されてことをみても、今なお「豊かな島」である。島外への通耕を生業に含めてきた歴史からみれば、今現在は島外にあっても島の人材であり、島の豊かさにカウントしてよいのである。美しい未来は、本書の活用にもかかるだろう。

(『八重山日報』2015年4月27日、4月29日)

#### 書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』

名桜大学国際学群国際文化専攻上級准教授

照屋 理

鳩間島と聞くと「鳩間中岡 走り登り」、あるいは「船は行く行く 鳩間の港」と歌い出したくなる人もいるのではないだろうか。幅広いジャンルの歌に書き込まれ、愛唱されてきた鳩間島、その地域誌ともいべき『竹富町史 第六巻 鳩間

島』が刊行された。

既に刊行されている竹富島編、小浜島編、新城島編と共に並べると背表紙の色合いが各巻ごとに異なっており、なんとも美しい。

序章、終章を含む全17章に、鳩間の歴史や祭祀・歌謡、人生儀礼、民間伝承、諸産業、交通・交易、方言など、島を構成する様々な要素が詰め込まれている。

しかも単に概説されているわけではない。緻密ではあるが想いの込められた文章から、島に育まれ、あるいは島を支えてきた実体験が記述のすれどに広がっているのが伝わってくる。鳩間出身の研究者や専門家で揃えられた執筆陣のなせる業である。単なる概説になるはずがない。

まず目に留まるのは、やはり西表島との関わりについての記述である。最近まで鳩間島の人々は西表島との間に横たわる「前の渡」を渡り、自らの島に乏しい水や薪、建材などを西表から調達してきた。また西表島の山野を拓いて田畠を起こし通いながら耕すいわゆる通耕を行ってきた。鳩間島のみではない。西表周辺に寄り添う島々では、さながら母親からのお乳を分け合う姉妹兄弟のように、西表島の豊かな自然の恩恵を、それぞれが少しずつもらい受けて生活が営まれてきた。本書および既刊の町史を併せ読むとそれがよく分かる。もし索引が作成されれば「西表」関連語彙が数多く立項されるはずであり、その密接な関係性が一目瞭然となろう。

第3章をはじめとする鳩間島の歴史についての記述も注目される。黒島からの移住者による鳩間での村建ての様子を「みんとうぬ年」(1701年)という正確な年と共に歌詞に刻んだ「鳩間元ジラマ」や、伊武田地域をはじめ、西表島の地名を歌い込んだり、稲栗を積んだ舟が往来する通耕の情景が描かれている「鳩間中岡」など、鳩間島の歴史に寄り添うような歌謡が記述中に散りばめられ、歴史と歌謡に関する事項が兄弟のように書きあって述べられている。島における歴史の層の中で歌謡は織り上げられ育まれたのであり、本来分けられるものではないということを再認識させられ

る。

また、挙げれば限りがないが個人的に興味深かったのは、第6章・8章・12章で紹介されている歌謡や説話、ことわざ、方言といった口頭伝承に関する記述である。島内に点在する御嶽や、牛が発見したとされる井戸についての伝承、神の乗り物なので鳩間では馬は飼われていないという話や、ピナカン(火の神)が島を支えているので明和大津波でも被害が少なかったとされる話など、島の文化や民俗概念が刻み込まれた豊かな説話群にも瞠目せざるを得なかった。

そして何と言っても60首に及ぼうとする祭祀歌謡の記録はまず圧巻である。結願祭で具体的な収穫を感謝して歌われる歌謡が多い中で、鳩間島にある九つの浜に弥勒世の千鳥が訪れるという内容の「鳩間千鳥節」や、ヤマトウから沖縄、宮古、多良間、石垣、竹富へと、島伝いに雨を呼び寄せ、途中黒島へ寄って雨を降らせた後に鳩間での降雨を願う雨乞い歌などは、特に興味をそそられた。

本書を読み進めて行くと、鳩間島と西表島の間に横たわり鳩間島の人々が幾度となく往来した「前の渡」は、どのくらい距離があるのか、どんなふうに海流が流れているのか、無性に確認したくなる。石西礁湖を舞台として織りなされた八重山の島々の歴史へも思いをはせてみたくなる。そして、かつて烽火台であったとされる鳩間中岡に走り登り、船が行く鳩間の港とその先に広がる情景を見渡してみたくなる、そんな一冊である。

(『八重山毎日新聞』2015年6月1日)

#### 書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』

##### —「神の島」への思い凝縮—

県立芸術大学附属研究所教授 波照間永吉

「島とうとうみである願い」。八重山の人々は、永遠の命の象徴として「島」を挙げた。しかし、1970年代以後の鳩間島の人々にとって、自らの智慧と愛郷の心なくして、その「島」の永遠性は守り得ないものとなっていた。

本書は「教育の島」で生まれ育った優れた研究

者・教育者の、学術的に価値ある論文で構成される。しかし、その行間に流れるのは、自らを育んできた父祖の地と、そこで生活に対する深い思いである。「地名」の項に挙げられた海岸地名の多さ。それは鳩間島の生活が海と深く関わってあったことの証左であるが、その一つ一つの場所でくり広げられる漁業の技術は、第9章第4節「水産業」にまとめられている。本書は15章からなるが、その記述は互いに関わり合って、鳩間島の歴史と人々の暮らしを活写している。

「鳩間村」が独立した村落となったのは1703年。1700年とこの年に、合わせて210人の人々が黒島から寄人として渡された。だが、自然と過酷な歴史はこの島を見逃してはくれなかった。人々は苦難を、神の守護によって乗り越えようとした。例えば、スクマ（初穂祭）の日、西表島の田で刈った稻穂を積んだ50艘余の船に乗った男たちが、「夜明けと共に一斉にマイヌママに船を着けて、稲の初穂を持ってサカサ（司）の前に供える」という具合にである。その「壯觀」と敬虔さ。

しかし、カツオ漁業やイカ漁などで賑わった島を過疎化の波が襲う。国や町の行政の手は及ばない。「水を下さい」という鳩間の人々の切実な願いが実現したのは、何と1980年7月のことである。「島の宿命」と言って済まされることではない筈である。

「音」、「小さな楽園」という二つのエッセーには、島の命とその豊かさを守るために立ち上がった人々の、静かな情念と希望が満ちあふれている。そして「鳩間島音楽祭」にも。「神の島 夢の通い路 鳩間島」への思いの詰まった1冊である。

（『沖縄タイムス』2015年6月6日）

書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』  
—先人の歩み まるごと記録化—  
琉球大学法文学部教授 赤嶺政信

竹富町史の「島じま編」シリーズは、すでに竹富島編、小浜島編、新城島編が刊行されており、

本書は同シリーズの4冊目である。700ページ余の大著であり、既刊のものと同様に、島の歴史をまるごと記録化するという関係者の意気込みが伝わってくる。

本書を通読して改めて思ったのは、竹富町史「島じま編」刊行の意義、すなわち歴史資料や民俗資料を各島ごとに1冊にまとめることの重要性についてである。歩んできた歴史が島ごとに固有であるのは当然のことだし、民俗の地域差として捉えられる島ごとの民俗の特徴は、地域間に共通する要素の存在とともに、民俗学的比較研究が成立する根拠になる。本書で確認できた、民俗学的議論に有用な資料のいくつかをあげることにする。

豊年祭のバーレーは、舟を沖合に出して、インヌスク（海の底）からもたらされるユー（豊穣）を満載してくる儀礼だとされるが、それと八重山の他地域の豊年祭や節祭の舟漕ぎ儀礼との共通性を見出すのは容易である。評者の関心を引いた鳩間の民俗の特徴は枚挙に暇がないが、魚の目玉が好物、人間のオナラが大嫌いで、仲良くなった人間に大漁をもたらすという「マーザ火」は、沖縄本島のキジムナーと性格が共通するのが興味深く、一方では、マーザ火とは区別される、樹に宿るキジムナーもいるという点も看過できない。また、死者の洗骨は女性の役割とする地域があるが、鳩間島での洗骨は男性の仕事で、女性は墓に行くこともないという点も要注意である。さらに、八重山各地の家の落成式で使用されるユイビトゥガナシが髪のある人形だというのは、鳩間島のみの特徴といえるだろう。

ところで、70年前の終戦直後には645人だった島の人口が、現在ではわずか52人だという事実には強い衝撃を受けた。そのような困難な状況のなかで島の未来がどのように展望できるのか、関係者の模索が続くものと思うが、その際に本書に記された島の先人たちの歩みを参照することがその一助となることを期待したい。

（『琉球新報』2015年7月19日付）

## 波照間島に関する資料

竹富町史編集事業は「通史」「資料編」「島じま編」を3本柱としています。「島じま編」はこれまでに『竹富島』(2011年)、『小浜島』(2011年)、『新城島』(2013年)、『鳩間島』(2015年)を刊行することができました。現在は『波照間島』を編集中です。そういうわけで、波照間島編専門部会の委員の先生方は、編集作業のため毎日のように編集室に足を運ばれるのです。

原稿の執筆や校正作業は普通、参考文献を照らし合わせながら行なわれます。そのため編集室では先生方のニーズにすぐ応えられるように、資料を把握しておく必要があります。主な調査記録や論文、記念誌、学校沿革誌、事典・辞書類などの基本資料を室内の机に並べて備えています。また、編集室がない場合は、石垣市立図書館へ走り探索することになります。市立図書館に所蔵しない資料については、それを収蔵する図書館と相互貸借の手続きをして取り寄せるようにしています。本目録はその備忘録のために作成したものです。

本稿は、2007–2008年の沖縄県立芸術大学附属研究所による「波照間島の伝統文化の調査研究」において、飯田泰彦が予備的調査として整理したものが土台となっており、2008年以降もその作業を継続して新たな情報を加えました。なお波照間島に関する資料について次の資料もご参照ください。

- ・『竹富町関係文献目録』(竹富町、1990年)
- ・『八重山民俗関係文献目録』(石垣市、1995年)
- ・「波照間文献目録」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸一』沖縄県立博物館、1998年) 283–291頁
- ・『八重山関係文献目録 自然編』(石垣市、2003年)

その他、仲本信幸氏の膨大な遺稿があります。これらは著書『回想録』に「著者の執筆一覧」として、タイトルと脱稿日が187–194頁に収録されていますが、本稿ではこれらを割愛することにしました。また、仲本氏の遺稿の一部を本田昭正氏が編集し発刊された『仲本信幸遺稿集 一波照間島の歴史・伝説考編 追加編一』(私家本、2014)は、波照間島の歴史と民俗を考察するうえで、たいへん貴重な資料です。

### 凡 例

- ・原則的に発行年月順に並べた。
- ・書誌情報として、なるべく発行年、執筆者、表題、発行所、頁数を記すように努めた。しかし、現物にあたることのできなかった資料もあり、情報の欠落したものもあることを予め断っておく。
- ・発行年については、年月のレベルまで記すことにした。その際、数字6桁で表わすことにした。

また、月レベルが不明の箇所は00とした。

例えば、1967年8月→196708、2013年11月→201311、2015年?月→201500

- 190800 田代安定「南波照間物語」(『東京人類学雑誌』〈第24巻第272号〉) →198208年
- 191500 比嘉重徳「波照間島・波照間節」『八重山の研究』(大城活版所)
- 192000 岩崎卓爾「与那国島と波照間及尖閣列島」「天火降り焦土トナリシ伝説」「オヤケ・アカハチの素性」「島民の亡命説」「ほたかり」家に秘蔵ノ古文書』『ひるぎの一葉』
- 192100 柳田國男「南波照間」(『朝日新聞』に連載の「海南小記」)
- 192211 佐藤惣之助「波照間島」159-160頁、「波照間の赤蜂」161頁『琉球諸島風物詩集』(京文社)
- 192501 宮良當壯「波照間島の話」(『三田評論』No.329)『三田評論』No.330) →198111参照
- 192711 波照間校島の研究会「下八重山の天気俚諺」(『八重山教育』〈第1号〉八重山郡教育部会)
- 193408 宮良當壯「波照間島の話」(『南島叢考』一誠社)
- 193900 河村只雄「波照間の納屋」、「波照間の乙女」、「波照間の拌所」『南方文化の探求』(創元社)
- 194211 江崎悌三「波照間島と与那国島」(本山桂川『嶋と嶋人』八弘書店) 54-91頁。
- 194707 伊波記者「(其の後どうなっているか) 波照間島・孤児・壕ッ子」(『八重山文化』〈No.12〉)
- 194700 宮良當壯「八重山を憶う」(柳田國男編『沖縄文化叢説』)
- 194710 宮良當壯「波照間島」『日本の隅々』(養徳社) 189-196頁
- 194909 仲本トシ「波照間の子供たち」(『八重山文化』〈No.34〉)
- 194900 宮良當壯「波照間島」(『若い人』〈No.1〉) (『八重山文化』〈No.12〉)
- 194911 宮良高芳「波照間島マラリア撲滅今昔」(『八重山タイムス』)
- 195003 東恩納寛惇「波照間島」『南島風土記—沖縄・奄美大島地名辞典—』(沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室)
- 195404 金関丈夫「沖縄波照間島発掘石器」(『西日本新聞』) →197806参照
- 195409 酒井卯作「波照間調査報告—沖縄八重山郡—」(『日本民俗学』(第2巻第2号))
- 195400 多和田真淳「八重山群島波照間島の植物」(琉球政府経済局林業試験場『琉球政府林業試験場研究報告』〈No.2〉琉球政府経済局林業試験場)
- 195400 永井昌文「琉球波照間島々民の生体学的研究」(『人類学研究』(1-3、4)) 32-50頁
- 195509 酒井卯作「波照間島を調査して」(『沖縄タイムス』(夕刊) 1955年9月13日)
- 195500 金関丈夫・國分直一『琉球波照間下田原貝塚調査報告』(日本人類学会・日本民族学協会連合会大会記事9集)
- 195611 西角井正慶「はてるま」(民俗芸能の会『芸能復興』〈No.11・12合併号〉)
- 195706 酒井卯作「波照間のお話し」、「波照間のお獄」(『民間伝承』(第21巻第5号))
- 195800 琉球政府文化財保護委員会「(指定文化財解説) 下田原貝塚」(『文化財要覧』)
- 195908 早稲田大学八重山学術調査団「波照間の総合調査を終えて」(『琉球新報』(夕刊) 1959年8月23日、1959年8月24日)
- 196007 池間利秀「竹富町の島々 波照間島 (1)」(『八重山毎日新聞』1960年7月16日)
- 196007 多和田真淳「波照間島の植物」(滝口宏編『沖縄八重山』校倉書房) 188-200頁
- 196203 本田安次「波照間島へ」19-27頁、「波照間島」273-301頁、『南島採訪記』(明善堂書店)
- 196204 「社説 波照間漁協活動に思う」(『八重山毎日新聞』1962年4月27日)
- 196301 木田喜重「波照間島のカツオ漁業」(大阪市大八重山学術調査隊編『八重山群島学術調査報告 1961』) 99-103頁
- 196300 兼島清「琉球諸島におけるリン鉱の産地と品質」(『琉球大学文理学部紀要(理学)』(No.6))

琉球大学)

- 196400 金関丈夫、國分直一、多和田真淳、永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」(『水産大学校研究報告一人文学編一』(第9号) 水産大学校)
- 196400 Kreiner Josef 「(波照間の秘密構造) 神祭と神概念」(『日本人類学会 日本民族学協会連合会大会記事』(18集))
- 196400 住谷一彦 「(波照間の秘密構造) 秘密集団の社会構造」(『日本人類学会 日本民族学連合会大会記事』(18集))
- 196403 宮良高弘 「波照間島における御嶽の諸形態」(『日本人類学会 日本民族学連合会大会記事』(18集))
- 196403 宮良高司 「波照間島における御嶽の諸形態」(『東洋大学大学院紀要』(No.1) 東洋大学大学院)
- 196501 仲本信幸 「波照間島に伝わる気象予知について 1」(『八重山タイムス』1965年1月12日—1月15日)
- 196504 酒井卯作 「龍宮のツカサ(波照間島)」(南島研究会『南島研究』(第2号))
- 196509 馬淵東一 「波照間島その他の氏子組織」(『日本民族学会報』(No.41)) 1—11頁→197112参照
- 196512 C・アウエハント 「波照間の文化と宗教」(『沖縄タイムス』1965年12月3日)
- 196602 宮良高弘 「祭祀継承からみた村落共同体の構造—琉球波照間島の場合—」(共同体比較研究会『共同体の比較研究』(第4輯) 共同体比較研究会) 53—70頁
- 196603 酒井卯作 「神田(波照間島)」「天皇と波照間島」(南島研究会『南島研究』(第4号))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 島の伝説」(『郷土』(No.3))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 黒島・波照間の先史遺跡概要」(『郷土』(No.3))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 島の概況、行動の記録」(『郷土』(No.3))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 黒島・波照間の民芸品」(『郷土』(No.3))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 黒島・波照間の父兄、児童生徒の生活及び教育環境」(『郷土』(No.3))
- 196607 「(黒島・波照間島調査報告) 島の風俗・習慣」(『郷土』(No.3))
- 196611 仲本信幸 「八重山産業経済の将来について」(『八重山毎日新聞』1966年11月11日)
- 196703 C・アウエハント 「波照間島の神行事について」(『沖縄文化』(第5巻3・4号(通巻23号)))
- 196706 喜舎場永珣 『八重山民謡誌』(沖縄タイムス社) → 《波照間の島節》398頁、《祖平花節》405頁、《夜雨節》403頁収録
- 196711 酒井卯作 「稻の伝来(波照間島)」(南島研究会『南島研究』(第7号))
- 196700 「竹富町の文法—竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間一」(『琉球先島方言の総合的研究』明治書院)
- 196700 クライナー=ヨーゼフ 「南西諸島における神観念・他界觀の一考察」(『沖縄文化』(第23号) 沖縄文化協会)
- 196807 牧野清 「波照間島の被害」143頁、「波照間島の状況」171—172頁、「牛が鯨になった伝説(波照間島)」248—249頁、『八重山の明和の大津波』(私家本)
- 196911 楠井善久 「波照間島の蝶類」(『昆虫と自然』(第4巻第11号)) 9頁
- 197010 新屋敷幸繁 「税のないハテルマ島」(『琉球おとぎばなし 幻想・寓話編』収載)

- 197011 国分直一「波照間島の聖所」『日本民族文化の研究』(慶友社)
- 197009 浦崎順「ああ波照間の五百人」『死のエメラルドの海—八重山群島守備隊始末記—』(月刊沖縄社)
- 197106 ヨーゼフ＝クライナー「南西諸島における神観念・他界觀の一考察」(大藤時彦・小川徹編『沖縄文化論叢』(第2巻) 平凡社)
- 197111 大浜信賢「南波照間島逃避行」75-92頁、「マンデーラ船漂流記」257-276頁、(『八重山の人頭税』三一書房)
- 197111 金闇丈夫「波照間」(谷川健一編『叢書わが沖縄 第3巻 起源論争』木耳社) 3-4頁。
- 197112 馬淵東一「波照間島その他の氏子組織」(馬淵東一・小川徹共編『沖縄文化論叢 第3巻 民俗編(II)』) →196511参照
- 197100 金闇文夫「波照間一波照間通信4—」(谷川健一編『叢書 わが沖縄』(No.3) 木耳社) 3-4頁
- 197100 立命館大学探検部編『波照間島 1970夏 沖縄八重山郡』(立命館大学探検部)
- 197100 山下幸男「波照間における社会」(上)(下) (『中京商学論叢』(18-2) 中京大学学術研究会)
- 197100 大平仁夫、寺下正清「波照間島の昆虫」(『はてるま森』(第2集)) 33-35頁
- 197204 鶴藤鹿忠「波照間島」『琉球地方の民家』(明玄書房) 126-130頁
- 197204 安積銳二「波照間島のこと」(大阪外国语大学内外語文学会『外語文学』(No.9)) 21-24頁
- 197206 宮良高弘「波照間島民俗誌」(『叢書 わが沖縄 別巻』木耳社)
- 197207 仲本信幸「八重山の鯨漁業の改革構想」(『八重山毎日新聞』1972年7月1日より2回連載)
- 197209 國分直一「海鳥の思想—波照間島の聖所—」(『日本民族文化の研究』) 398-401頁
- 197200 アウエハント・コルネリウス「波照間島の雨乞い儀礼」(『アジア研究』(No.26))
- 197200 アウエハント・コルネリウス「波照間島の神行事について」(『沖縄文化論叢』(No.3) 平凡社) 360-374頁
- 197200 馬淵東一「波照間島その他の氏子組織」(『沖縄文化論叢』(No.3) 平凡社) 345-359頁
- 197303 「第5図波照間島地質概略図」(通商産業省工業技術院地質調査所『沖縄水質資源開発調査報告・八重山地方』) 89頁
- 197303 「第13図波照間島地下水調査地点位置図」(通商産業省工業技術院地質調査所『沖縄水質資源開発調査報告・八重山地方』) 89頁
- 197300 尾竹俊亮「(さいはてレポート) 西と南のさいはて 与那国島・波照間島」(『青い海』(No.21)) 52-57頁
- 197302 本田安次「(八重山の信仰と芸能) 波照間島の歌」『離島・雑纂』(木耳社) 102-111頁
- 197403 仲本信幸「波照間島の産業と経済」(『八重山毎日新聞』19740308) →4回連載
- 197400 比嘉政夫「崩壊する村落社会—波照間島—」(『新沖縄文学』(No.26)) 57-62頁
- 197406 岩崎卓爾「与那国島ト波照間島及尖閣列島」『岩崎卓爾一巻全集』(伝統と現代社) 52頁
- 197406 馬淵東一「波照間島その他の氏子組織」『馬淵東一著作集』(No.1) (社会思想社) 363-379頁
- 197410 仲本信幸「日本最南端の波照間島①」(『沖縄春秋』(No.13)) 70-73頁
- 197410 仲本信幸「日本最南端の波照間島②」(『沖縄春秋』(No.14)) 32-35頁

- 197412 池原真一「八重山群島波照間島の農業生産組織」(『琉球大学農学部学術報告』(No.21) 琉球大学) 83-97頁
- 197412 「波照間島の話」(仲井真元楷編『沖縄民話集』)
- 197400 新城祐吉「(沖縄通信) 波照間島」(『えとのす』(No.2)) 92-94頁
- 197400 長沢憲正「沖縄の農業のあり方を示す—沖縄県・竹富町波照間島—」(朝日新聞社編『新しい農村1974』朝日新聞社)
- 197400 Z「農民ありき」(『新沖縄文学』(第26号))
- 197503 沖縄県教育委員会『波照間の方言—琉球方言緊急調査第2集—』(沖縄県文化財調査報告書第3集) (沖縄県教育委員会) 56頁
- 197500 新城祐吉「(沖縄通信) 波照間島」、「波照間の独特な姓氏の呼び方」(『えとのす』(No.2))
- 197500 井上潔「波照間島における蝶の記録若干」(『月刊 むし』(第52号)) 19頁
- 197500 柏木伸夫「南十字星のみえる島 波照間へ」(『月刊 むし』)
- 197500 宮良和正「(村から村) 波照間島」(『沖縄春秋』(No.21))
- 197602 仲本信幸「波照間島に伝はる神話」(伊波南哲編『虹—総合文化誌—』(第29号) 伊波南哲)
- 197605 加屋本正一「波照間島の農耕と儀礼」(東京・八重山文化研究会『八重山文化』(No.4)) 42-58頁
- 197605 村山秀雄「波照間空港開港」(『八重山毎日新聞』「不連続線」欄1976年5月20日)
- 197609 東松照明「日誌・波照間島」『朱もどろの華 一沖縄日記一』(三省堂) 16-39頁
- 197610 竹富町文化財保護審議会「下田原貝塚」39頁、「オヤケアカハチ誕生の地」40頁、「ミズガンビ群落」41頁、「コート盛」42頁、「長田嶽」44頁、「高那の景勝」45頁、「シムスケー」46頁、『竹富町の文化財』(竹富町教育委員会)
- 197600 宮良和正「(村から村) 波照間島」(『沖縄春秋』(No.21)) 4-9頁
- 197600 「(波照間) 下田原貝塚」(『続・沖縄の文化財』(沖縄離島編) 月刊沖縄社)
- 197600 アウエハント・コルネリウス「波照間島の神歌」(『アジア民族研究』)
- 197602 仲本信幸「波照間島に伝わる神話」(『虹』(No.29) 伊波南哲) 35-36頁
- 197600 杉本志郎、田中洋「波照間島・春と夏の蝶」(『SATSUMA』(第72号)) 152-156頁
- 197701 村山秀雄「波照間島の土地改良」(『八重山毎日新聞』「不連続線」欄1977年1月27日)
- 197703 「波照間島」(沖縄歴史研究会『沖縄県の歴史散歩』)
- 197706 鈴木正崇「波照間島の神話と儀礼」(『民族学研究』(第42第1号)) 24-58頁
- 197711 伊集弘子ほか「波照間島住民の受療行動」(沖縄県公衆衛生協会編『沖縄県公衆衛生学会記録集』(第9回) 沖縄県公衆衛生協会) 20-25頁
- 197712 友寄英正「(八重山通信) ユイと若者の町—波照間島—」(『青い海』(No.68)) 64-65頁
- 197712 住谷一彦「波照間島の盆祭—調査日誌抄—」(住谷一彦・ヨーゼフクライナー共著『南西諸島の神観念』未来社) 118-142頁
- 197700 住谷一彦・クライナーヨーゼフ「パティローマーモノグラフによる日本民族=文化複合へのアプローチー」(『南西諸島の神観念』未来社) 213-311頁
- 197712 仲本信幸『回想録—ダイヤモンド婚を記念して—』(私家本)
- 197803 河名俊男・大城逸郎「八重山諸島・波照間島の地形と地質—平坦面の形成過程および地殻変動についての予察—」(『沖縄県立博物館紀要』(No.4))

- 197803 琉球大学保健学部「波照間島と佐敷村における65才以上年齢者の意識調査より」(琉球大学保健学部『特別研究小論文集』(No.5))
- 197803 上地強・福地友紀智・譜久村英二「波照間住民の受療パターン」(琉球大学保健学部『特別研究小論文集』(No.5))
- 197803 片桐真二・辻邁「八重山の一離島、波照間島に於ける小児の貧血について」(『沖縄の小児保健』(6))
- 197803 福地友紀智・上原強・譜久村英二「波照間島住民の傷病とその処置方法—波照間島—」(琉球大学保健学部『特別研究小論文』(No.5))
- 197806 関根賢司「島に生きる不安 —赤と青のフォークロア—」(『琉球新報』1978年6月4日)
- 197806 仲本信幸伝承「油雨」86-88頁、「波照間の井戸田」89頁「鯨になった牛」94頁、「ナリヤカジク」95-97頁、「牛の屋敷」98-99頁、「見直されたからす」100-101頁、「海に沈んだ南波照間」109-110頁、「鍋搔田」111-115頁、(竹原孫恭『ばがー島 八重山の民話』大同デザインセンター)
- 197806 金関丈夫「沖縄波照間島発掘石器」『琉球民俗誌』(法政大学出版局) 36-38頁←『西日本新聞』1954年4月9日
- 197806 新川明「波照間島」『新南島風土記』(大和書房) 30-53頁
- 197807 「(沖縄奄美の秘島めぐり) 日本最南端の島(波照間島)と日本最西端の島(与那国島)」(『旅行ホリデー』)
- 197808 田畠博子「南波照間の思想」(『沖縄文化』(No.50) 沖縄文化協会) 52-58頁
- 197810 加屋本正一『波照間島』(私家本)
- 197810 下嶋哲朗「波照間島」『沖縄・書き書きの旅』(刊々堂出版社) 169-178頁
- 197812 富川盛八「波照間島航空気象観測所—島—」(『沖縄時報』(第79号)) 6-7頁
- 197812 司馬遼太郎「波照間の娘」『街道をゆく6 沖縄・先島への道』(朝日新聞社) 131-141頁
- 197812 沖村雄二「波照間の琉球層群」(沖縄地学会編『琉球列島の地質学研究』(No.3))
- 197812 河名俊男・大城逸郎「波照間島の地形と地質」(沖縄地学会編『琉球列島の地質学研究』(No.3))
- 197812 吉川博恭・富田友幸「波照間島の水理地質」(沖縄地学会編『琉球列島の地質学研究』(No.3))
- 197812 西表信「波照間島」18-20頁、「高那の岸壁」20-21頁、「波照間島点描」21-23頁、「ハイハテローの想い出」67-81頁『南島情趣』(沖縄出版社)
- 197800 堀信行・田村明子・太田陽子「琉球列島波照間島の離水サンゴ礁地形とその変形」(『日本地理学会予稿集』(No.15)) 120-121頁
- 197800 古川博恭・富田友幸「沖縄県波照間島の水理地質」(『琉球列島の地質学研究』(No.3)) 205-214頁
- 197800 大柿哲朗・佐野一・杉浦正輝「波照間島の児童・生徒の発育、体格及び運動能力」(『九州体育抄録』(4-1))
- 197903 沖縄総合事務局八重山宮古総合農業開発調査事務所『波照間地域開発方向調査報告書—昭和53年度広域農業開発基本調査—』(沖縄総合事務局)
- 197903 仲田善祥「波照間島の民俗芸能—ムシャマーを中心として—」(沖縄県教育委員会『八重山の民俗芸能 No.1—沖縄県文化財調査報告書第28集、沖縄県民俗芸能悉皆調査第1集—』)

- 197906 丸山顯徳「波照間島昔話話型一覧」(奄美・沖縄民間文芸研究会『奄美・沖縄民間文芸研究』(第2号)) 22-26頁
- 197906 田中文雅「波照間島の昔話」(『奄美・沖縄民間文芸研究』(第2号)) 27-29頁
- 197910 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成 IV 八重山篇』(角川書店) →波照間島の歌謡66曲収録。
- 197912 松丸国照、瀬名波任「波照間島の更新世大型有孔虫について」(木崎甲子郎編『琉球列島の地質学研究』(第4巻) 琉球大学理学部海洋学科) 119-122頁
- 197900 大柿哲朗・佐野一・杉浦正輝「波照間島の児童・生徒の発育、体格および体力能力」(『九州体育抄録』) 52-54頁
- 197900 松永伍一「波照間島の潮騒」(『青い海 No.81 春季号』) 6-7頁
- 197900 金関丈夫・国分直一「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『台湾考古誌』(法政大学出版局)
- 197900 酒井卯作「波照間島の粟の祭」(『南島研究』(No.20)) 88頁
- 197900 鈴木正崇「波照間の盆とムシャーマ」(『まつり通信』(No.218))
- 197900 金関丈夫・國分直一「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」『台湾考古誌』(法政大学出版局)
- 198001 岩本忠「波照間方言と関連して」「波照間方言の特徴的音声について」(『京都産業大学国際言語科研究所所報』(1-1))
- 198008 「波照間島調査報告」(琉球大学地理研究会『琉大地理 一粟国島調査報告・波照間島調査報告一』(第14号)) 26-76頁
- 198009 沖縄国際大学南島文化研究所「第1次波照間島調査に向けて」(『南島文化研究所所報』(No.10))
- 198009 「(秘島の旅) 日本最北端の島礼文島と最南端の波照間島 同じ9月だというのにこの違い」(『旅行ホリデー』)
- 198011 「波照間—20代後半から30代が中心—」(琉球新報社編『郷友会』) 294-296頁
- 198011 沖縄国際大学南島文化研究所「波照間島第1次調査の概要」(『南島文化研究所所報』(No.11)) 3-4頁
- 198000 杉浦正輝『沖縄県離島住民の保健医療情報の収集評価ならびにその対策に関する研究—波照間島を事例として—』(トヨタ財團助成研究報告書) 231頁
- 198000 「(市町村指定文化財) オヤケアカハチ誕生の地」(『季刊 沖縄アルマナック』(No.3)) 174頁
- 198000 安次富郁哉ほか「離島受療行動パターン—波照間・西表島—」『沖縄公衆衛生誌』
- 198000 『海のシルクロード—石垣島・西表島・与那国島・波照間島・宮古島を訪ねて—』(朝日文化センター) 16頁
- 198000 波平勇夫「多元的指標による村落階層構造の分析 池間島、具志頭村港川、波照間島の比較」(『沖縄国際大学文学部紀要 社会学科篇』(8-1))
- 198101 崎原盛造「沖縄県における離島住民の受療行動に関する研究—波照間島の事例—」(『民族衛生』(47-1)) 21-40頁
- 198102 田中幸人「波照間のアマカラ伝説」(田中幸人・東靖晋『漂民の文化誌』葦書房) 194-197頁
- 198103 沖縄国際大学南島文化研究所「波照間島第2次調査の概要」(『南島文化研究所所報』(No.12))

- 198103 新納義馬「竹富町波照間島の御嶽林」(沖縄県教育委員会『沖縄県天然記念物調査シリーズ 第21集 沖縄県社寺・御嶽林IV』) 247-268頁
- 198106 沖縄国際大学南島文化研究所「波照間島第3次調査の概要」(『南島文化研究所所報』(No.13))
- 198106 野原全勝「波照間島の漁業」(『南島文化研究所所報』(No.13))
- 198106 仲地哲夫「波照間島・戦前の暮しと戦争体験」(『南島文化研究所所報』(No.13))
- 198106 畠山篤「波照間島のブーリン」(『南島文化研究所』(No.13))
- 198107 『波照間漁港概要』(竹富町)
- 198111 宮良當壯「波照間島の話」(『宮良當壯全集13』) ←192401参照
- 198111 沖縄国際大学南島文化研究所「波照間島第4次調査の概要」(『南島文化研究所所報』(No.14)) 4頁
- 198111 石原昌家「波照間島の地域的特徴と戦争体験」(『南島文化研究所所報』(No.14)) 77-87頁
- 198111 宮城邦治「波照間島の植生概観と動物相について(2)」(『南島文化研究所所報』(No.14)) 4頁
- 198111 野原全勝「かつお船が消えた行政の谷間・離島」(『南島文化研究所所報』(No.14)) 1頁
- 198100 「ハテルマギリ」(『望郷・沖縄 No.3』書籍株式会社→(『沖縄写真帖第1輯』復刻))
- 198109 下嶋哲朗『そてつ祭り』(理論社)
- 198100 千木良芳範・宮城邦治「波照間島および与那国島の真正クモ類」(『HEPTATHELA 2 (1)』)
- 198202 『沖縄在波照間郷友会 二十周年記念誌』(沖縄在波照間郷友会)
- 198202 沖縄国際大学南島文化研究所編『(地域研究シリーズNo.3) 波照間島調査報告書』(沖縄国際大学南島文化研究所)
- 198202 畠山篤「波照間島の豊年祭と祈年祭」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 19-38頁
- 198202 野原三義「波照間の simana (島名)」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 9-18頁
- 198202 安仁屋政昭・堂前亮平「波照間島・石垣島・西表島の共同店と村落構造」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 67-75頁
- 198202 野原全勝「波照間島の漁業」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 59-66頁
- 198202 石原昌家「波照間島の地域的特性と戦争体験」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 77-87頁
- 198202 仲地哲夫「強制疎開とマラリア」(沖縄国際大学南島文化研究所編『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 89-93頁
- 198202 仲地哲夫「1910年代-1930年代における波照間島の生活」(沖縄国際大学南島文化研究所編『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 95-103頁
- 198202 来間泰男「波照間島の農業とユイの意義」(沖縄国際大学南島文化研究所編『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 39-57頁
- 198202 堂前亮平「波照間島—その地理的概況—」(『(地域研究シリーズ No.3) 波照間島調査報告書』) 3-7頁
- 198202 宮城邦治「波照間島の植生概観と動物相」(『地域研究シリーズ No.3 波照間島調査報告書』)

書』) 105-123頁

- 198203 波照間島民俗芸能保存会『波照間島のムシャーマ—南国の豊年祈願と祖先供養の祭典—』
- 198205 比嘉正一「波照間島の蝶類」(『琉球の昆虫』(第6号)) 82頁
- 198205 石垣博孝「石垣島の民家集落・波照間島の民家集落」(太田博太郎・児玉幸多・鈴木嘉吉・坪井清足編『図説 日本の町並み12』) 172頁
- 198205 「与那国島・波照間島」(『沖縄放送協会史』沖縄放送協会資料保存研究会)
- 198206 竹富町波照間生活改善実行グループ連絡研究会『日本列島最南端の里の暮らしの工夫—結成記念誌—』(竹富町波照間生活改善実行グループ連絡研究会)
- 198208 田代安定「南波照間物語」(『東京人類学雑誌』[復刻版] 第一書房) ←190800参照
- 198209 真栄城守定「波照間へ」『八重山・島社会の風景』(ひるぎ社) 11-44頁
- 198210 鎌倉芳太郎「波照間島の民家」『沖縄文化の遺宝』(岩波書店) 29-31頁
- 198211 石垣在波照間郷友会『創立30周年記念誌』(石垣在波照間郷友会)
- 198200 鈴木正崇「世界観の解説—沖縄波照間島の世界観—」(山岸健・平野敏政・宮家準編『生活の学としての社会学—人間・社会・文化—』)
- 198200 真喜志金造「波照間島及び久高島に関する」(『琉球大学保健学医学雑誌』)
- 198200 石原ゼミナール戦争体験記録研究所『もうひとつの沖縄戦—マラリヤ地獄の波照間島—』(ひるぎ社)
- 198200 加藤文哉「波照間に於ける神行事について」(『沖縄社会意識調査報告集 II』)
- 198200 並本浩美「波照間の人々の結びつきについて」(『沖縄社会意識調査報告集 II』)
- 198200 川本純子「波照間の歴史における人頭税と移住」(『沖縄社会意識調査報告集 II』)
- 198303 コルネリウス=アウエハント「兄弟姉妹(bigiri-bunari)の関係について—波照間島の場合—」(沖縄県商工観光部県民文化課編『沖縄文化の源流を考える—復帰10周年記念行事沖縄研究国際シンポジウム報告書—』沖縄県) 46-53頁
- 198303 中川尚史・崎原永輝・島村均「キクガシラコウモリの波照間からの記録」(『沖縄生物学会誌』(No.21))
- 198303 当山昌直「波照間島産オガサワラヤモリの採集例」(『AKAMATA』(No.1) 沖縄両生爬虫類研究会)
- 198303 喜舎場一隆「前近代における波照間島の民間療法」(『琉球大学法文学部紀要史学・地理学篇』(No.26)) 157頁
- 198305 沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』(沖縄タイムス社) →「ナビカキマス」「南波照間」「波照間」「波照間御嶽」「ハテルマギリ」「波照間島」「波照間島の植物」「波照間島の方言」「波照間島のミズガンビ群落」「波照間島の燐鉱」「波照間森」などの項目あり。
- 198306 永積安明「南蛮人ゲートホーラー—波照間島の伝説—」(編集発行・高江洲義寛『青い海』7月号 第13巻第6号 (通巻124号))
- 198311 沖縄在波照間前部落会『部落会結成十周年記念誌』(沖縄在波照間前部落会)
- 198312 酒井卯作「八重山郡波照間島の船と気象(資料)」(『南島研究』(No.24)) 69頁
- 198300 大村明雄「琉球列島波照間島産化石サンゴの放射年代に関する新知見」(『四紀研』) 19-22頁
- 198300 市川重治「波照間島の手突」『南島針突紀行』(那覇出版社) 227頁
- 198403 上杉兼司「波照間島の蝶類相とその特徴」(沖縄生物学会『沖縄生物学会誌』(No.22))

- 198405 新城俊昭「南の島の戦争—波照間島で聞いた話—」157—167頁、「幻の島『南バテローマ』への旅立ち」168—178頁、『南ぬ島旅情』(那覇出版社)
- 198407 竹富町立波照間小学校『創立90周年記念誌 90年の歩み』
- 198407 庄司義和「波照間島における医療保険について」(一橋大学社会学部岡庭ゼミナール編『沖縄社会意識調査報告集(4)』一橋大学社会学部) 32—56頁。
- 198412 加藤信重「波照間島・黒島の海岸植生」(『植物と自然』(第18巻第13号)) 22—25頁
- 198400 野本寛一「焼畑地域研究ノート 八重山諸島の焼畑 波照間島」『焼畑民俗文化論』(雄山閣出版)
- 198400 住谷一彦「バティローマの神歌」(『文学』(52巻6号))
- 198400 「下田原貝塚」302頁、「波照間島のムシャーマ」308頁、(沖縄県教育委員会編『沖縄の文化財』沖縄県教育委員会)
- 198502 一泉知永「波照間・考」(『沖縄タイムス』(上) 1985年2月15日、(下) 同2月16日)
- 198503 渡邊欣雄「二つの民俗誌—波照間島と池間島—」『沖縄の社会組織と世界観』(新泉社)
- 198506 近藤克人「波照間島における環境衛生について」(一橋大学社会学部岡庭ゼミナール編『沖縄社会意識調査報告集 5』一橋大学社会学部) 18—27頁
- 198511 比嘉朝進「日本最南端の波照間島」『親子でたずねる沖縄名所』(沖縄教育出版)
- 198500 太田英利・山下晶子「オナダケヤモリの波照間島からの記録」(『沖縄生物学会誌』(No.23)) 33・34頁
- 198500 C.OUWEHAND『HATERUMA—socio-religious aspects of a South-Ryukyuan island culture—』(E.J.Bill,Leiden,The Netherlands)
- 198601 遠藤庄治「人魚と津波」(『琉球新報』1986年1月17日)
- 198603 「島からシリーズ・波照間島(上)」(『沖縄タイムス』1986年3月4日) → (中) 1986年3月11日、(下) 1986年3月18日
- 198603 沖縄県教育庁文化課編『沖縄県文化財調査報告書74集 下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告—』(沖縄県教育委員会)
- 198603 アウエハント・コルネリウス「波照間島における神観念と世界観の一考察」(『沖縄文化の古層を考える—法政大学第7回国際シンポジウム—』) 52—63頁
- 198610 西澤喜子「波照間島のムシャーマ」(『琉球新報』1986年10月2日)
- 198600 太田英利・島村均・崎原永輝「八重山群島波照間島産サキシママダラの斑紋異常の一例」(『沖縄生物学会誌』(No.24)) 17—20頁
- 198600 『角川地名辞典47 沖縄県』(角川書店) → 「高那崎」「はてるま」「波照間」「波照間喰石」「波照間島」「波照間森」などの項目あり。
- 198702 浦山隆一「八重山50・51・52 白郎原御嶽・阿幸侯御嶽・真徳利御嶽」182—183頁、「八重山53 阿底御嶽」184—185頁、「八重山54 大底御嶽」186—187頁、「八重山55 新本御嶽」188—189頁、「八重山56 美底御嶽」190頁、『南西諸島の「聖域」における宗教空間の研究』(南島聖域研究会)
- 198703 『昭和61年度 離島調査報告書 竹富町波照間島』(沖縄県離島振興協議会)
- 198706 太田好信「(ほん) 波照間文化の構造—アウエハント著「波照間—南部琉球」—島嶼文化における社会宗教的側面」(『季刊 人類学』(第18巻第2号) 京都大学人類学研究会) 217—23

- 198711 宮良高弘「八重山諸島—波照間島（島の民俗的世界・伝説から見た集落形成・御嶽と祭祀の構造）」（谷川健一編『日本の神々—神社と聖地—』（第13巻））599—607頁
- 198712 川田文子「波照間紀行 バイハティローマの伝説に魅かれて」（『季刊 銀波』文化出版局）
- 198700 アウエハント・コルネリウス「波照間島の社会宗教的構造をめぐって」（『人類学報』（No.62））131—146頁
- 198700 嶋村弘文「波照間島方言のアクセント体系」（『南海研紀要』（8—1））1—11頁
- 198700 耕田武宗『12歳の小さな恋 幸福にいちばん近い島からの手紙』（ボプラ社）
- 198801 「スイカに打ち込む5人衆—キビの島波照間に新しい風吹き込む—」『八重山日報』1988年1月1日
- 198801 野原敏弘「波照間の水祭—ニライカナイの信仰が生きる—」（『琉球新報』1988年1月17日）
- 198802 目崎茂和「波照間島—大地震のたびに割れた島—」153頁、「高那崎—ハテの島のハテナ？ハテナ？の地形—」154頁『南島の地形—沖縄の風景を読む—』（沖縄出版）
- 198802 平山輝男「波照間方言の生活語彙」『南琉球の方言基礎語彙』（桜楓社）39—60頁
- 198803 稲福定蔵「新天地波照間での生活」『波瀬—沖縄県八重山離島教師の歩み—』（私家本）
- 198808 海上保安庁編『波照間島 海底地形図』（海上保安庁）
- 198904 又吉盛清「楽土・南波照間と台湾」（『琉球新報』1989年4月12日）
- 198905 「特集 泡盛に酔う 与那国・波照間泡盛紀行」（『コーラルウェイ』日本オーシャン航空）
- 198906 「115 ピッチュウル御嶽の石」414—415頁、「127 石になった男」430頁、「139 牛が見つけた井戸」455—456頁、「177 鍋搔田」522—524頁（福田晃編『日本伝説大系』（第15巻）みずうみ書房）
- 198907 戸井昌造「学童慰靈之碑（波照間島1）」220—221頁、「日本最南端之碑（波照間島2）」222—223頁（『沖縄絵本』昌文社）
- 198900 『日本民謡大観（沖縄奄美） 八重山諸島篇』（日本放送出版協会）→波照間島の歌謡19曲収録
- 198900 坂本磐雄「集落景観の事例 八重山地方 波照間島北・南」（『沖縄の集落景観』九州大学出版会）
- 198900 大野真男「琉球波照間方言の音対応と音変化」（『岩手大学教育学部研究年報』（48—2））
- 199003 「波照間の道」（沖縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書』沖縄県教育委員会）107—115頁
- 199006 牧野清「真徳利御嶽」382頁、「白郎原御嶽」383頁、「阿幸保御嶽」383—386頁、「阿底御嶽」386—387頁、「美底御嶽」387—388頁、「新本御嶽」388—389頁、「大底御嶽」389—390頁、「大石御嶽」390—391頁、「ピッチュウル御嶽」391—392頁、「ケイシムリ御嶽」392頁、「長田御嶽」392—393頁、「波照間島のお嶽概説」393—398頁『八重山のお嶽』（あーまん企画）
- 199010 中山盛茂、富村真演、宮城栄昌「アスク御嶽の司 崎枝ナビ」212—216頁、「大底（ブスク）御嶽の司 山田茂」216—222頁、「大石御嶽の司 石野ノブ」223—226頁、「新本御嶽の司 船附ヨシ」226—227頁、「美底御嶽の本司 底原マサ」227—228頁、「ケシムリ御嶽の司 本田フミ」228—229頁、「大泊御嶽の司 米盛ナヘ」229—231頁『のろ調査資料 一九六〇

年一九六六年調査』(ポーダーインク)

- 199000 大野真男「琉球波照間島方言の助数詞—その形態と意味構造—」(『琉球の方言』(14))
- 199101 山本脩「お餅を食べない「日本最南端」の正月」(『週刊新潮』)
- 199103 平安名盛巳「波照間島における山羊のオウシマダニ寄生状況」(『沖縄県家畜衛生試験場年報』(第26号))
- 199104 安里英子「波照間島」『揺れる聖域—リゾート開発と島のくらし—』(沖縄タイムス社) 115—124頁
- 199109 本田安次「波照間島の御嶽」23頁、「波照間島の豊年祭」98頁、「波照間島のムシャマ」107頁、「波照間島のアンガマ」115頁、「波照間島の節祭」200頁、「波照間島の獅子の太鼓」300頁、「波照間島の棒踊り」310頁『沖縄の祭と芸能』(第一書房)
- 199109 幸地哲「ムシャマ 波照間」(沖縄タイムス社『おきなわの祭り』沖縄タイムス社)
- 199110 上地清市、新垣和夫「波照間島における地震観測」(『沖縄技術ノート』(第38号)) 38—42頁
- 199100 故前津武追悼集刊行委員会編『追悼 島と組織に生きた 一前津武追悼集一』
- 199100 「日本最南端の集落・波照間島」(平良敬一編『南島・沖縄の建築文化—その2・今日の住まい30題と伝統民家論—』建築資料研究社)
- 199100 高良倉吉「バイバティローマ伝説の風景」(『コーラルウェイ 11・12月号』日本トランസｫｰシャン航空)
- 199203 通事孝作「〈聖地めぐり〉白郎原御嶽」10頁、「波照間の高倉」17頁(『竹富町史だより』(第1号) 竹富町)
- 199203 泉水英計「波照間島における東西双文觀の批判的検討」(『常民文化 15』成城大学常民文化研究会) 1—31頁
- 199200 長沼信夫「波照間・南大東両島における水環境とその利用」(『駒沢地理』28) (成城大学常民文化研究会『常民文化』(第15号))
- 199200 大竹昭子「最果ての島—波照間島のムシャマ—」(『季刊 銀花』(第91号))
- 199200 沖縄総合事務局「波照間島」(『昭和52年度農業用水地下水調査水理解析業務報告(その3)』)
- 199200 「波照間島のムシャマ」84頁、「八重山節」528頁(『琉球芸能事典』那覇出版社)
- 199301 『県立博物館移動図書館 ふるさと発見 はてるまじま史跡めぐり』(沖縄県立博物館)
- 199301 石垣久雄「波照間島からみた八重山の歴史(上)」(『八重山日報』1993年1月29日) → (中) 1993年1月31日、(下) 1993年2月1日
- 199302 新垣和夫、上地清市、伊良皆邦夫「波照間島・西表島の地震検知について」(『沖縄管内気象研究会誌』(第21号)) 77頁
- 199303 ワッカーモニカ「波照間島の世界觀における象徴的二元論 批判的に考察する」(久留米大学比較文化研究所研究生)
- 199303 新城安哲「初めての波照間島」(沖縄県立博物館友の会編『博友』(第7号) 沖縄県立博物館友の会)
- 199305 タイムスリップ in 琉球取材班「たいむすりっぷ in 琉球 —「南嶋探験」から100年—18 バイバティローマ 南波照間伝説」(『琉球新報』1993年5月2日)
- 199305 「波照間島」(比嘉康文・岩垂弘編著『沖縄入門』)
- 199306 波照間文化協会準備会『会報 波照間文化』(創刊号)

- 199306 玉城功一「「波照間文化協会」(仮称) 設立準備会発足に当たって」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 中鉢良護「C・アウエハント著『HATERUMA』の民俗誌的意義」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 「「C・アウエハント博士」について」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 阿利直治「原体験」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 「波照間島関係文献目録 (1)」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 「今後の日程」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199306 「編集後記」(『会報 波照間文化』(創刊号) 波照間文化協会)
- 199307 東田盛善「沖縄県波照間島の地下水の水質」(『工業用水』(第418号) 日本工業用水協会)
- 199308 阿利直治、中鉢良護「『波照間文化協会』がめざすもの」(上) (『八重山毎日新聞』1993年8月12日) → (下) 1993年8月13日参照
- 199308 入嵩西正治「波照間島」『八重山糖業史』(石垣島製糖株式会社) 278-290頁
- 199309 松山巖「近代日本が見た夢 11回 キビ作・製糖編 沖縄」(上) (『週刊朝日』朝日新聞社) → (中) (12回) 1993年9月10日、(下) (13回) 1993年9月17日
- 199309 登野原武「南波照間(蘭嶼)の旅」(上) (『八重山毎日新聞』1993年9月12日) → (下) 1993年9月13日
- 199309 通事孝作「〈新聞で知る町の今昔〉波照間島の燐鉱採掘」(『竹富町史だより』(第4号) 竹富町) 7頁
- 199310 波照間文化協会『会報 波照間文化』(第2号) (波照間文化協会)
- 199310 「波照間文化協会が発足—会長に玉城功一氏を選出—」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 「波照間文化協会設立趣意書」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 「1993(平成5)年度活動計画」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 新城永佑「波照間文化協会に期待するもの」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 玉城潤二「波照間島や八重山諸島の気候概要」(『会報 波照間文化協会』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 通事孝作「ソンソーメーの歌」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 西前津松市「山羊たちの里」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 「波照間関係文献目録 (2)」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199310 通事孝作「編集後記」(『会報 波照間文化』(第2号) 波照間文化協会)
- 199311 「波照間文化協会第3回定例会資料 玉城功一「時間・空間・方角」
- 199311 「波照間島」(まぶい組編『島々清しや』ボーダーインク) 270頁
- 199311 通事孝作「波照間島 もっと南の、その果てへ」(まぶい組『島々清しや』ボーダーインク) 271-273頁
- 199312 通事孝作「『歴史の道』を歩く 祖平花道」(『琉球新報』1993年12月19日)
- 199312 「波照間文化協会第4回定例会資料 東田盛善「波照間島の地下水の水質」
- 199300 忘勿石之碑建立事業期成会編『記念誌 忘勿石』(忘勿石之碑建立事業期成会)
- 199300 本木修次「もう一つの沖縄戦」『離島めぐり15万キロⅡ』(古今書院)

- 199300 有吉佐和子「南の果て 波照間島」『日本の島々、昔と今。』(中央公論社)
- 199300 ワッカ＝モニカ「波照間島の世界観における二元論批判的考察する」
- 199402 「波照間文化協会第6回定例会資料 新城寅生「波照間島の言語」」
- 199403 稲井良介「ルポ波照間」〈上〉(『朝日新聞』1994年3月22日) → 〈中〉1994年3月23日、〈下〉1994年3月24日参照
- 199403 「〈新聞資料紹介〉波照間島と紅頭嶼」(『竹富町史だより』(第5号) 竹富町) 4-9頁
- 199403 「波照間文化協会第7回定例会資料 通事孝作「波照間島に関する著書および論文」」
- 199404 仲地哲夫「日露戦争と波照間島」(『地域と文化』(第82号) ひるぎ社) 1頁
- 199404 武藤美也子・松本英子「波照間島のソーロン(ムシャーマ)(1991年調査)」(高阪薰ほか編『沖縄祭祀の研究』翰林書房) 113-132頁
- 199405 宮里英伸「星空観測タワー」(『八重山毎日新聞』「不連続線」1994年5月31日)
- 199405 波照間文化協会『会報 波照間文化』(第3号) (波照間文化協会)
- 199405 「島の自然と文化を考える—五氏が地質、生活等を研究報告—」(『会報 波照間文化』(第3号) 波照間文化協会)
- 199405 中鉢良護「〈波照間の稻作〉覚え書き」(『会報 波照間文化』(第3号) 波照間文化協会)
- 199405 通事孝作「波照間の人口動態—近世から現代まで—」(『会報 波照間文化』(第3号) 波照間文化協会)
- 199405 「〈史跡フォト散歩〉伝マシュク村跡遺跡」(『会報 波照間文化』(第3号) 波照間文化協会)
- 199405 上里多一「(エッセイ) スニッパ」(『会報 波照間文化』(第3号) 波照間文化協会)
- 199405 通事孝作「波照間カツオ物語」(『会報 波照間文化』(第3号))
- 199405 「波照間関係文献目録(3)」(『会報 波照間文化』(第3号))
- 199407 『竹富町立波照間小学校創立百周年記念しおり』(竹富町立波照間小学校創立百周年記念事業期成会)
- 199407 安仁政昭「(書評) 沖縄戦争マラリア事件」(『沖縄タイムス』(夕刊) 1994年7月19日)
- 199407 「波照間島」(沖縄歴史研究会『新版 沖縄県の歴史散歩』)
- 199408 玉城功一「波照間での史跡めぐり並び定例研究会の開催について」(通知)
- 199408 石堂徳一「(書評) 竹富町史 第11巻 資料編」(『沖縄タイムス』(夕刊) 1994年8月30日)
- 199409 通事孝作「(古文書紹介) 波照間島のクリヨン」(『竹富町史だより』(第6号) 竹富町) 17頁
- 199411 『OKINAWA GAPPAL MAGAZINE GARVE 一特集 バイバティローマ』(vol. 3)
- 199400 河名俊男・中田高「サンゴ質津波堆積物の年代からみた琉球列島南部周辺海域における後期完新世の津波発生時期」(『地学雑誌』(vol. 103, No. 4))
- 199503 ワッカ＝モニカ「八重山郡波照間島における『オナリ神信仰』—『オナリ神信仰』論の諸問題—」(『西日本宗教学雑誌』(第17号))
- 199503 通事孝作「(資料紹介) 波照間村番所の板証文」(『竹富町史だより』(第7号) 竹富町)
- 199503 竹富町立波照間小学校『創立百周年記念誌 波の子』(竹富町立波照間小学校)
- 199503 大山了己「民俗音楽から見た波照間島の自然環境の認識」(沖縄民俗学会『沖縄民俗研究』(第15号)) → 199512参照
- 199507 石垣繁「民話の系譜 バイバティロー説話の世界観」(『八重山毎日新聞』1995年7月22日) → 7回連載1995年7月29日まで。

- 199508 高城隆「再び、与那国島から」『花綵列島—民俗と伝承—』(木犀社)
- 199509 通事孝作「〈聖地めぐり〉 貞徳利御嶽」(『竹富町史だより』(第8号) 竹富町) 21頁
- 199512 安里長祐「『夜雨(ユルアミ)節』考」(『八重山毎日新聞』1995年12月3日)
- 199512 大山了己「島の自然 波照間島」22頁、「自然に関する民俗音楽 波照間島」47頁、「島人たちの自然環境認識 波照間島」149頁、「自然認識の分類 波照間島」202頁、「自然に関する音楽の構造」222頁、『うすれゆく島嶼文化—歌謡と自然認識の世界—』(ひるぎ社)
- 199500 安藤潔「果てウルの島—最南端・沖縄県波照間島—」『日本最果て紀行』(近代文藝社)
- 199500 おきなわ学校劇研究会編「おきなわの民話劇 波照間物語(中学生)」『おきなわの民話劇』(沖縄時事出版)
- 199601 新城俊昭「南の島の戦争—波照間島で聞いた話—」(『南の島のはなし』むぎ社) 90—99頁
- 199602 上野和男「波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼—ムシャーマ行事を中心とする盆行事の考察—」(『国立歴史民俗博物館研究報告』(第66号) 国立歴史民俗博物館) 179—200頁
- 199602 加治工真市「波照間方言の音韻研究」(『沖縄文化研究』(22) 法政大学沖縄文化研究所) 137—181頁
- 199603 「七 波照間島」(竹富町史編集委員会『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』竹富町) 881—1031頁
- 199603 通事孝作「(文化財探訪) マシュク村遺跡」(『竹富町史だより』(第10号) 竹富町) 18頁
- 199603 通事孝作「むかし八重山① カツオ漁の盛んな時代」(『情報 やいま』(No.45) 南山舎)
- 199604 「島からの人材を育てる—スポーツを通じた島への貢献—」(『情報 やいま』(No.46) 南山舎)
- 199604 「郷友会は欠かせぬ存在—島からの返事—」(『情報 やいま』(No.46) 南山舎)
- 199604 通事孝作「むかし八重山② 波照間島の高倉」(『情報 やいま』(No.46) 南山舎)
- 199605 大嶺高輝「波照間島便り① 別れ」(『情報 やいま』(No.47) 南山舎)
- 199607 『歴史を訪ねて—波照間島の史跡めぐり—』(沖縄県立石垣少年自然の家)
- 199607 本木修次「日本最南最西の島 波照間島・与那国島」(『だから離島へ行こう』ハート出版)
- 199608 野池元基「環境を破壊する公共事業6 沖縄波照間島、西表島 一風土の違いを無視して進む農地造成—」(『週刊 金曜日』)
- 199608 大田静男「学童慰靈碑」165頁、「波照間の戦争」166頁『八重山の戦争 —シリーズ・八重山に立つ No.1—』(南山舎)
- 199609 通事孝作「(文化財探訪) 下田原城跡」(『竹富町史だより』(第10号) 竹富町) 21頁
- 199600 櫻井寛「波照間海運・安永觀光 石垣島→波照間島 『日本最南航路』は神出鬼没!?」(『時刻表すみずみ紀行II 西日本編』トラベルジャーナル)
- 199600 記念誌編集委員会編『波の子—波照間小学校創立100周年記念誌—』(竹富町立波照間小学校)
- 199600 岸本義彦「南琉球の下田原式土器とその遺跡」(『史料編集室紀要』(21) 沖縄県立図書館史料編集室)
- 199706 鎌田慧「はての島・波照間島」『ドキュメント・この地に生きる』(筑摩書房)
- 199709 通事孝作「(写真に見るわが町) 波照間島の燐鉱採掘」3頁、「(新聞資料紹介) 燐鉱と海に輝く波照間島」4頁、「波照間島の人口動態」7—12頁、(『竹富町史だより』(第12号) 竹富町) 4頁

- 199710 屋比久猛弥ほか「波照間島の集中豪雨について—1997年5月1日の事例解析—」(『沖縄管内気象研究会誌』(第27号)) 23-24頁
- 199710 金城義勝ほか「波照間島のバックグランド・ラドン濃度」(『沖縄県衛生環境研究所報』(第31号)) 97-103頁
- 199700 大石芳野「南十字星」『沖縄 若夏の記憶』(岩波書店)
- 199801 吉本美奈子『波照間島における食の変遷と意味』(琉球大学総合科学課程日本語教育コース)
- 199803 沖縄県立博物館『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』
- 199803 島村修「波照間島総合調査にあたって」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 1-6頁
- 199803 神谷厚昭・山田真弓「波照間島の地形と地質」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 7-24頁
- 199803 豊見山元「波照間島のシダ植物相」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 25-31頁
- 199803 比嘉ヨシ子「波照間島の小動物」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 32-64頁
- 199803 嵩原建二・島村修・加治工真市「波照間島で記録された鳥類とその方言名について」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 65-86頁
- 199803 与那城義春「波照間島の鳥類調査」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 87-95頁
- 199803 土肥直美「波照間島の人骨調査」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 96-114頁
- 199803 當眞嗣一「波照間島の考古学」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 115-136頁
- 199803 仲間留美「毛原第一墓・庸原第一墓の調査」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 137-146頁
- 199803 通事孝作「八重山郡雄割拠時代の波照間島における村落と英雄」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 147-168頁
- 199803 前田真之「波照間と皇民化」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 169-177頁
- 199803 萩尾俊章「波照間島の日撰暦クリヨンとその周辺」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 178-191頁
- 199803 加治工真市「波照間方言動詞の活用」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 192-219頁
- 199803 當間一郎「波照間島の芸能—ムシャーマを中心に—」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 220-239頁
- 199803 仲底善章「波照間島の神行事について—ブーリン(豊年祭)を中心に—」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 240-254頁
- 199803 瑞慶山昇・津波古聰「資料紹介・波照間の古墓は出土の陶磁器」(『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館) 255-262頁

- 内  
第  
)  
考  
民  
石・  
美  
波照  
6頁  
石・  
美  
術・  
谷・  
告書  
術・  
史・  
古・  
歴  
合調  
告書
- 199803 與那嶺一子「昭和初期における波照間島の織物（聞き書き）」（『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館）263－282頁  
199803 「波照間文献目録」（『波照間島総合調査報告書—自然・歴史・民俗・考古・美術・工芸—』沖縄県立博物館）283－291頁  
199803 仲底善章「波照間島の神行事」（『沖縄県立博物館紀要』（第24号）沖縄県立博物館）75－118頁  
199804 赤嶺政信「四方と中心」『シマの見る夢—おきなわ民俗学散歩—』（ボーダーインク）13－16頁  
199808 桜井信夫著・津田櫻冬画『ハテルマシキナ—よみがえりの島・波照間—』（かど創房）  
199809 青地久恵「波照間島」『南風に吹かれて—「釧路」より「八重山」の島々へ—』（大阪文学学校草書房）224－250頁  
199809 「〈古文書紹介〉波照間村萬面引二付渡海之百姓中江申渡候条々」（『竹富町史だより』（第14号）竹富町）3－12頁  
199809 石垣繁「民話の系譜 バイバテロー説話の世界」（八重山文化研究会『八重山文化論集』（第3号）—牧野清先生米寿記念—）87－115頁  
199811 比嘉朝進「波照間の拝所」『沖縄の拝所300』（沖縄総合図書）  
199800 渡久地健「ヌンゲンジマの縁地保全—波照間島を旅して—」『地域開発』  
199903 通事孝作「〈聖地めぐり〉阿底御嶽」（『竹富町史だより』（第15号）竹富町）14頁  
199904 東喜望「波照間島出身の英傑と異人・渡海伝承」『沖縄・奄美の説話と伝承』（おうふう）132－152頁  
199904 下川裕治+ふれすアルファ「波照間ワイルドライフ」（『好きになっちゃった沖縄の離島』アジア楽園マニュアル）  
199905 朝岡康二「波照間の村と井戸のつながり」（国立歴史民俗博物館編『村が語る沖縄の歴史—「再発見・八重山の村」の記憶—』新人物往来社）165－186頁  
199905 森口豁「パティローマへの旅—アジアの北限としての沖縄—」『沖縄 近い昔の旅—非武の島の記憶—』（凱風社）216－225頁  
199908 崎原恒新『八重山ジャンルごと小事典』（ボーダーインク）→波照間島関係約100項目あり。  
199909 「南波照間島伝説—可能性高い台湾東部の島—」（『新南嶼探検—笠森儀助と沖縄百年—』琉球新報社）109－114頁  
199909 川上ちはる「波照間島」『沖縄旅行記』（新風舎）  
199909 登野盛恒雄「波照間島便り18 祭りにむけて」（『情報やいま』（No.84）南山舎）  
199910 安本千夏「第12回 琉球だより なにもないのに全てがある波照間の暮らし」（『アウトドアイクリッピメント』（vol. 46））  
199911 『大黒丸を語る夕べ』（小冊子）  
199912 二宮真理子・新本百合子『ベスマ！—まりこ先生とゆりちゃんの波照間島日記—』（ボーダーインク）  
199900 太田陽子「波照間島—サンゴ礁段丘の島・日本のバルバドス—」『変動地形を探る I 日本列島の海成段丘と活断層の調査から』（古今書林）  
199900 本木修次「波照間島—軍命で無人化、もう一つの沖縄戦 沖縄県（竹富町）—」『無人島が

呼んでいる』(ハート出版)

- 199900 通事孝作「波照間島の燐鉱採掘」(『情報やいま』(第87号) 南山舎)
- 200002 東喜望「八重山の叙事伝承とその背景」(第1節「波照間島出身の英傑と異人・渡海伝承」150-161頁) (法政大学沖縄文化研究所沖縄八重山調査委員会『沖縄八重山の研究』相模書房)
- 200003 「波照間島の史跡巡見」(『竹富町史だより』(第17号) 竹富町) 2頁
- 200003 沖縄県教育庁文化課編『空港整備予定地周辺の遺跡—与那国空港・新多良間空港・波照間空港整備予定地周辺における遺跡詳細分布調査報告書— 沖縄県文化財調査報告書 第138集』(沖縄県教育委員会)
- 200005 大城学「サスケ(波照間島)」『沖縄芸能史概論』(砂子屋書房) 317-318頁
- 200006 戸井昌造「学童慰靈之碑(波照間島Ⅰ)」、「日本最南端之碑」『沖縄絵本』(平凡社)
- 200009 吉屋松金・比嘉清『うちなあぐち小説 遥かなるパイバティローマ』(南謡出版)
- 200000 安本千夏「ムシャーマ」(『沖縄・離島情報 2001年度版』)
- 200012 赤坂憲雄「パイバティローマ伝説」『海の精神史—柳田国男の発生—』(小学館) 44-50頁
- 200000 佐古井貞行ほか『生活社会の構造論理 波照間島の消費構造』(愛知教育大学)
- 200000 江本勝「波照間島訪島記」(『月刊 波動』(No.86) 株IHM) 5-7頁
- 200101 「史跡探訪 古道を行こう！ 波照間島 祖平花道」(しかくまめ編『トウンナ Vol. 2』)
- 200101 「波照間島 ムシャーマ」(『トウンナ Vol. 2』しかくまめ) 66-69頁
- 200102 『慶田盛安三先生文部大臣表彰教育功労賞受賞祝賀会』(パンフレット)
- 200102 山内健治「波照間島の神々と農耕変化について」(明治大学『政経論叢 第69巻 第4・5・6号』)
- 200102 文／宮良作・絵／宮良瑛子『忘れな石—沖縄・戦争マラリア碑—』(日本図書センター)
- 200107 吉本ばなな「波照間島旅の雑記 友は人生の宝」『本日の、吉本ばなな』(新潮社)
- 200108 飯田泰彦「最南端のうるまの島」2-3頁、「ムシャーマ」4-5頁、(八重山地域情報センター『あかがーら』(第16号) 石垣市立図書館)
- 200108 大田将之「島々の芸能⑧ 波照間島 波照間の獅子棒」(八重山地域情報センター『あかがーら』(第16号) 石垣市立図書館) 6頁
- 200111 「波照間島—島を支える結の精神—」(『情報やいま』(No.100) 南山舎)
- 200112 林完次「星砂とサンゴ礁—沖縄県波照間島—」『宙の旅』(小学館) 128頁
- 200100 島袋伸三・渡久地健編「サンゴ島におけるサトウキビ農業の変化—圃場整備後の波照間島の事例—」(『人間科学』(8) 琉球大学法文学部)
- 200100 安里進、春成秀爾編『考古学資料集27 沖縄県大泊浜貝塚』
- 200201 喜舎場孫正「赤ブザの反乱」7-38頁、「バナリの武士の屋」67頁、「鳥と鼠になった女」67-68頁、「ウヤマス、アカタナ伝」75-76頁『八重山昔話』(ミル出版)
- 200203 藤永善行「波照間島日記 イラブチャーと泡盛」(『情報やいま』(No.111) 南山舎)
- 200203 杉村孝夫「八重山波照間方言の植物語彙」(『第4回沖縄研究国際シンポジウム 世界に拓く沖縄研究』沖縄文化協会) 307頁
- 200205 宮里英伸「星空観測タワー」『八重山不連続線一心豊かに故郷を生きる—』(ニライ社) 150頁
- 200205 『うるま 2002年5月号—特集 波照間島—』(第5巻第5号(通巻第50号)) (三浦クリエ

イティブ)

- 200206 大木隆志「古宇利島に似た階段状の島—高那崎～南—（波照間島）」『海と島の景観散歩—沖縄地図紀行—』（ボーダーインク）151－155頁
- 200207 ラッチャーラ「豊年祭」（『情報やいま』（No.115）南山舎）
- 200207 中鉢良護「歴史と構造—波照間島のブーリン／アミジワ—」（記念論集刊行会編『琉球・アジアの民俗と歴史—比嘉政夫教授退官記念論集—』榕樹書林）213－270頁
- 200211 『石垣在波照間郷友会創立50周年記念式典並びに祝賀会』（パンフレット）（石垣在波照間郷友会創立50周年記念事業期成会）
- 200200 加納章雄「現代南島における伝統的作物の復活—沖縄県石垣島・波照間島のキビ栽培を中心にして—」（『史泉』（96）関西大学史学・地理学会）→200710参照
- 200200 権名誠「夜空に満足」『旅の紙芝居』（朝日新聞社）
- 200200 安里進「起源論争の島」（『東北学』（第6号）東北芸術工科大学東北文化研究センター）
- 200200 名嘉正八郎「下田原グスク（波照間島）—竹富町字波照間—」（『グスク探訪ガイド』ボーダーインク）
- 200202 『沖縄県の地名』（小学館）→「波照間島」「波照間空港」「波照間村」「下田原貝塚」「下田原グスク」「大泊浜貝塚」「真徳利御嶽」「阿幸俣御嶽」「白郎原御嶽」などの項目あり。
- 200303 「波照間島の歴史・伝説考—仲本信幸遺稿—」（『竹富町史だより』（第23号）竹富町）3－21頁
- 200303 通事孝作「ケシムリ御嶽」（『竹富町史だより』（第23号）竹富町）25頁
- 200303 保坂達雄「籠もりの起源神話 波照間島のクムルパン」『神と巫女の古代伝承論』（岩田書院）
- 200304 林哲次「日本一番南へ星を見る旅」（Coralway 編集部編『沖縄島々旅日和—宮古・八重山編—』新潮社）52－57頁
- 200305 『金武イツキカジマヤー祝賀会』（パンフレット）
- 200306 さとなお「自分史上最高ビーチ&ビール」『沖縄上手な旅ごはん』（文藝春秋）→200506参照
- 200307 三木健「危機に立つ波照間の文化遺産」『八重山研究の歴史』（南山舎）170－174頁
- 200309 通事孝作「バイバティローマ伝説の島」（八重山人頭税廃止百年記念事業期成会記念誌部会編『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』八重山人頭税廃止百年記念事業期成会）200－202頁
- 200309 通事孝作「（聖地めぐり）美底御嶽」（『竹富町史だより』（第24号）竹富町）33頁
- 200310 杉村孝夫「八重山波照間方言の形態音韻論」（『第4回沖縄研究国際シンポジウム ヨーロッパ大会 世界に拓く沖縄研究』沖縄文化協会）186頁
- 200310 須藤義人「（司馬遼太郎の描いた「弥勒」観）に関する一考察—「南波照間島」伝説から弥勒信仰へと結ぶ眼差し—」（『沖縄大学地域研究所所報』（No.30）沖縄大学）
- 200310 山内健治「バティローマ島の変化と不变の三〇年—社会構造を中心に—」（『南島史学』（6号）南島史学会）60－112頁
- 200311 狩俣恵一・丸山顯徳編『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』（三弥井書店）→「波照間島の歴史と暮らし」15－23頁、「波照間島の昔話」181－226頁、「御願崎の夫婦石／語り手・浦崎浩」243－245頁
- 200300 高橋誠一「八重山古地図による集落の復原 波照間島・与那国島の集落」『琉球の都市と村落』（関西大学東西学術研究所）

- 200403 湯本誠「黒糖生産さとうきび農業—沖縄県・波照間島の事例—」(『調査と社会分析—特集・新たな都市・農村関係の創造を探求する実証的研究 沖縄県・岩手県・青森県・北海道の比較を通して—』(No.5))
- 200403 「〈資料紹介〉波照間の歴史・伝説考(三)一仲本信幸遺稿集一」(『竹富町史だより』(No.25))  
3-28頁
- 200403 通事孝作「〈記念碑を訪ねて6〉大東亜戦転進記念碑」(『竹富町史だより』(No.25)) 30頁
- 200404 赤座憲久『波照間からの旅立ち』(小峰書店)
- 200406 通事孝作「パイバティローマの村」116-119頁、「波照間島の燐鉱採掘—景気を浮揚させ住民生活を潤す—」152-163頁(中田龍介『八重山歴史読本』南山舎)
- 200407 離島エイジング研究会編「波照間島調査報告」(「波照間島の経済と社会」、「波照間島の高齢者生活調査の概要」、「離島の高齢者の精神健康と lifesatisfaction」、「波照間島の高齢者生活とその生活史 カジマヤーと戦争マラリアを中心に」、「波照間の共同店と広義の高齢者福祉」、「波照間高齢者における『愉しみ』の現状」、「波照間高齢者の経験と労働移動」、「調査データ」、「集計結果」『長寿村』におけるエイジング問題の研究)(明治学院大学)
- 200407 向一陽「波照間島 日本の最南端」『日本全国 離島を旅する』(講談社) 26-33頁
- 200409 撮影／コルネリウス＝アウエハント、編集／静子＝アウエハント、解説／中鉢良護『写真集 波照間島—祭祀の空間—』(榕樹書林)
- 200409 コルネリウス＝アウエハント、静子＝アウエハント『HATERUMA—波照間 南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相—』(榕樹書林)
- 200409 「〈資料紹介〉波照間の歴史・伝説考(四)一仲本信幸遺稿集一」(『竹富町史だより』(No.26))  
2-28頁
- 200409 通事孝作「〈写真に見るわが町24〉墓造りユイマール」(『竹富町史だより』(No.26)) 29頁
- 200400 長嶋俊介「波照間島 はての珊瑚の島」『島 日本編』(講談社)
- 200400 向一陽「波照間島 日本の最南端」『日本全国離島を旅する』(講談社)
- 200400 卜部勝彦「地域を考える地形図読図 第6回 波照間島」『地理』
- 200400 鈴木正崇「沖縄 波照間島の神話と儀礼」『祭祀と空間のコスモロジー—対馬と沖縄—』(春秋社)
- 200400 カベルナリア吉田「八重山諸島 その③竹富島・波照間島 島旅のきっかけを作った2つの島」『沖縄の島へ全部行ってみたサー』(東京書籍)
- 200400 安里嗣淳・本田昭正「八重山諸島波照間島採集の狭刃形石斧」(『沖縄埋文研究』(2) 沖縄県立埋蔵文化財センター)
- 200502 大山剛「波照間島の家畜」(沖縄県肉用牛生産供給公社編『かがやけ肉用牛—社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社27年の軌跡—』沖縄県肉用牛生産供給公社) 93-95頁
- 200503 飯田泰彦「サガサニチィ、サニチィ」(『情報やいま』南山舎)
- 200506 さとなお「自分史上最高ビーチ&ビール」『沖縄上手な旅ごはん』(文春文庫)(文藝春秋)  
←200503参照
- 200500 斎藤潤「波照間島—南果つる島の幻の泡盛—」『沖縄・奄美《島旅》紀行』(光文社)
- 200500 山村雅康「竹富島／西表島／波照間島」『人口減少時代の豊かな暮らしと仕事の場』(批評社)
- 200500 森口鰐「五七年前の『有事』 島は地獄と化した—波照間島—』『誰も沖縄を知らない—27

- の島の物語一』(筑摩書房)
- 200500 カベルナリア吉田「民宿勝連荘（波照間島） 祝本書最高齢！89歳おじいちゃんと語り明かそう（息子さんもナイス）」『オキナワ宿の夜はふけて』(東京書籍)
- 200603 沖縄ナンデモ調査隊「『幻の泡盛』はホントに幻なの？ —『泡波』が幻か否かは、個々の立ち位置による。『機会があったら』飲み放題もウソじゃない—」70－71頁、「最南端の島にはシエスタがある？一日の出前から日没までサトウキビ畑で仕事？いえいえ、亜熱帯の島には適した生活様式があるんです—」143－144頁、「パイバティローマはどこにある？—南にある淨土を目指して、島を旅立った人たちの伝説は、ただの伝説ではなく、琉球王府の文書に記されていた！—」205－208頁『沖縄・離島のナ・ン・ダ！？』(双葉社)
- 200603 沖縄県立埋蔵文化センター編「波照間島の避難壕」『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（VI）八重山諸島編 一沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第41集—』(沖縄県立埋蔵文化財センター) 92－93頁
- 200603 『国指定史跡保存管理計画書 下田原城跡』(竹富町教育委員会)
- 200603 日本ナショナルトラスト編『竹富町波照間島 歴史的景観の保存・活用調査 報告書』(日本ナショナルトラスト)
- 200609 通事孝作「〈記念碑を訪ねて6〉祖平宇根之碑」(『竹富町史だより』(No.28) 竹富町) 4頁
- 200610 「果てに飛ぶ 波照間島&与那国島紀行」(『うるま 2006年10月号』三浦クリエイティブ)
- 200611 「波照間島の泡波」(『島へ。』海風舎)
- 200708 西岡敏「(資料紹介) 波照間島西村のイシュパンコンギ(一番狂言)」(奄美沖縄民間文芸編集委員会『奄美沖縄民間文芸』(第7号) 奄美沖縄民間文芸学会)
- 200710 嘉納章雄「八重山諸島石垣島・波照間島におけるキビ栽培の復活とその背景」『南島の畑作文化—畑作穀類栽培の伝統と現在—』(海風社) 133－153頁
- 200710 「沖縄県地域史協議会研修会 巡見資料 2007年度 第2回」
- 200806 砂川哲雄「波照間島の悲劇の歴史」(『八重山毎日新聞』2008年6月26日) →201101参照
- 200806 藺内博行「最南端の祭へ —ムシャーマ 波照間島—」『約束の島、約束の祭』(社会情報センター出版局) 129－158頁
- 200806 「最南端の公開天文台 波照間島星空観測タワー」(『島たや』(vol 3) クイチャーバラダイス友の会) 70－71頁
- 200807 泉水英計「オーエハント」(渡邊欣雄、岡野宣勝、佐藤壮広、塩月亮子、宮下克也編『沖縄民俗辞典』吉川弘文館) 80頁
- 200809 「特集 一番南の波照間島」(『うるま 2008年9月号』三浦クリエイティブ) 10－43頁
- 200811 「竹富町波照間島 歴史的景観の保存・活用調査報告書」(編集委員『日本の町並み調査報告書集成』(第31集) 海路書院) 303－464頁←200603参照
- 200800 村田信夫「沖縄県八重山の町並み景観—竹富島と波照間島—」
- 200902 有吉佐和子「南の果て 波照間島」『日本の島々、昔と今。』(岩波書店) 187－218頁。←198  
104参照
- 200903 『波照間島の民家と歴史的集落景観—竹富町波照間島伝統的建造物群保存対策調査報告書—』(竹富町教育委員会)
- 200903 『竹富町波照間島伝統的建造物群保存対策調査報告書 波照間島の民家と歴史的集落景観』

(竹富町教育委員会)

- 200912 岡谷公二「半世紀前の沖縄日記（一）」（飛火の会編『飛火』（第38号））
- 200909 竹富町史編集委員会編『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 一波照間島近代資料集一』（竹富町）
- 200909 本田昭正「明治三〇年代における波照間島の生活」（竹富町史編集委員会編『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 一波照間島近代資料集一』（竹富町）25-31頁）
- 200909 登野原武「解題 『島庁通達綴 波照間村事務所』について」（竹富町史編集委員会編『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 一波照間島近代資料集一』（竹富町）34-39頁）
- 200909 里井宏美「解題 『波照間島番所日誌』について」（竹富町史編集委員会編『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 一波照間島近代資料集一』（竹富町）179-180頁）
- 200909 玉城功一「解題 『波照間小学校沿革誌』について」（竹富町史編集委員会編『竹富町史 第10巻 資料編 近代5 一波照間島近代資料集一』（竹富町）226-231頁）
- 200900 『地域貢献冊子シリーズNo.1 竹富町波照間島研究報告書—島民ライフ・ヒストリー集とアンケート調査—』（立命館大学政策科学部2008年度高村ゼミナール）
- 200903 かりまたしげひさ「波照間方言と与那国方言の形容詞語尾を言語接触からみる」（『南島文化』（第31号）沖縄国際大学南島文化研究所）
- 200906 伊藤麻由子「波照間島 黒糖・泡波」『沖縄の離島45 島のめぐみの食べある記』（オレンジページ2009年6月号）
- 200907 上江洲儀正「波照間の話 —「南山舎」の窓から②—」（『NPO現代の理論社会フォーラム ニュースレター』）（NPO現代の理論社会フォーラム）
- 201002 「第3章 波照間島・天水田と畠」（安渓遊地・盛口満編著『田んぼの恵み—八重山のくらし—』ボーダーインク）
- 201002 椎名誠『波照間の怪しい夜』（雷鳥社）
- 201003 西岡敏「波照間方言のことわざ集—『波照間島の歴史・伝説考 仲本信幸遺稿集』をもとにしたの音声記号化の試み—」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』（第14巻第2号（通巻第25号）））
- 201003 古谷野洋子「八重山のカママーリに関する一考察—波照間島の事例から—」（『沖縄文化研究』（No.36）法政大学沖縄文化研究所）275-316頁
- 201006 親盛長明「これも離島苦？」『ある医介輔の記録』（南山舎）218-219頁
- 201006 林博史「波照間島 飢えとマラリア」『沖縄戦が問うもの』（大月書店）
- 201011 岡谷公二「半世紀前の沖縄日記（二）」（飛火の会編『飛火』（第39号））
- 201012 酒井卯作「南波照間」『柳田国男と琉球—『海南小記』をよむ—』（森話社）
- 201101 砂川哲雄「波照間島の悲劇の歴史」『八重山風土記—コラム「不連続線」2002-2009—』（南山舎）181頁←200806参照
- 201101 島村修「ヤシガニと波照間の食文化」219-237頁、「波照間島のウニ」239-252頁、「波照間島総合調査にあたって」278-291頁『島の自然を守る』（南山舎）
- 201103 古谷野洋子「八重山のカツオ漁を巡る生業ネットワーク—波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを中心に—」（『沖縄文化研究 37』法政大学沖縄文化研究所）167-213頁
- 201103 通事孝作「〈聖地めぐり26〉阿幸保御嶽」16頁、「〈写真に見るわが町27〉舟漕ぎ儀式のある

- シシイン（節祭）」17頁（『竹富町史だより』〈No.32〉竹富町）16頁
- 201107 菅洋志「波照間島」『ぶらりニッポンの島旅』（講談社）
- 201108 江上剛「離島の経済を支えるサトウキビという単一農産物農業—波照間製糖—」『奇跡のモノづくり』（幻冬社）
- 201201 南風原英育「波照間島民の悲劇」『マラリア撲滅への挑戦者たち』（南山舎）79－85頁
- 201203 里井洋一「異人は「マニラ」の人々か？—八重山蔵元絵師画稿と波照間島漂着人をつなぐ—」（『竹富町史だより』〈No.33〉竹富町）6－11頁
- 201204 奥土晴夫『波照間島の自然』（新星出版）
- 201206 山本素世「伝統行事、祭祀の継承と地域の持続性—波照間島の学校の取り組みを事例として—」（杉本久未子・藤井和佐編『八重山にみる地域「自治」—八重山にみる地域「自治」—』ナカニシヤ出版）75－92頁
- 201207 加藤庸二『原色ニッポン《南の島》大図鑑—小笠原から波照間まで114の「楽園」へ—』（阪急コミュニケーションズ）
- 201212 加賀谷真梨「プロセスとしての〈共同体〉—沖縄・波照間島の「戦争マラリア」をめぐる語りを事例に—」（『東洋文化』93 東京大学東洋文化研究所）
- 201301 「八重山でなごみ時間 竹富島 波照間島」（『島へ。』海風舎）
- 201303 阿利よし乃「八重山諸島波照間島の御嶽祭祀集団」（『沖縄民俗研究』〈第31号〉沖縄民俗学会）53－78頁
- 201303 通事孝作「(写真に見るわが町30) 島びとの憩いの場である共同売店」（『竹富町史だより』〈No.34〉竹富町）18頁
- 201403 中鉢良護「波照間民俗史稿 I 一波照間史の試み—」（『〈アジア+近現代〉研究所通信』〈No.13〉仲鉢良護）
- 201403 中鉢良護「波照間民俗史稿 II 一波照間島の村落形成—」（『〈アジア+近現代〉研究所通信』〈No.14〉仲鉢良護）
- 201404 本田昭正編『仲本信幸遺稿集 一波照間島の歴史・伝説考編 追加編—』（私家本）
- 201505 はいの咲「波照間島の苦悩と誇り」（古川純編『八重山の社会と文化』南山舎）
- 201505 森まゆみ「竹富島の宇宙〈第23回〉 戦争マラリア」（清田央軌編『すばる 2015年6月号』集英社）366－374頁
- 201508 酒井卯作「琉球旅日記（9）」（『法政大学沖縄文化研究所』〈第77号〉法政大学沖縄文化研究所）2－4頁
- 201510 石垣佳彦「石垣佳彦写真館 仲本信幸さん」（『月刊 やいま』〈No.261〉南山舎）
- 201510 東田盛善「波照間島陸水の水質に及ぼす島尻層群泥岩の影響」129－131頁、「波照間島地下水の水質に及ぼす琉球石灰岩の働き」145－146頁、『南西諸島の天然水—海洋、気団、地質および人間活動の影響—』（ポーダーインク）

# 2015年度 地域史協議会報告

## 1、沖縄県地域史協議会2015年度総会および第1回研修会

5月29日（金）沖縄本島北部の今帰仁村で開催された、沖縄県地域史協議会2015年度総会および第1回研修会へ参加しました。午前の部は琉球王国のグスクおよび関連遺産群として世界遺産にも登録されている今帰仁城址の巡見を行ないました。今帰仁城は県内最大規模を誇るグスクですが、いつごろ誰によって築城されたのかは正確には解明されておらず、その謎を解くために現在も発掘調査が続いているそうです。難攻不落といわれ堅牢な石垣が高く積まれた今帰仁城は世界遺産の風格に満ちあふれていました。

今帰仁城跡隣の村歴史文化センターでは昨年、村の一括交付金事業で復元された宝刀「千代金丸」が展示されてありました。千代金丸は1416年に北山王の攀安知【はんあんち】が中山の尚巴志に攻め滅ぼされた時に持っていたとされる宝刀で、国宝にも指定されています。忠実に再現された模造品は制作費一千万円だそうで、歴史文化センターの中で金色に光輝いていました。少人数のグループに分かれての巡見であったため、ガイドからの説明も聞き取りやすく、内容の濃いものとなりました。梅雨時にもかかわらず晴天に恵まれたことも幸いでした。

午後の部は会場を今帰仁村コミュニティーセンターに移し、講演会が行なわれました。内容は講演I「今帰仁と沖縄戦」仲原弘哲氏。講演II「山原での沖縄戦」川満 彰氏。報告I「沖縄陸軍病院南風原壕群20号の臭いの再現」上地克哉氏。「南風原町文化センター戦後史展示について」山城みどり氏となっていました。今年は戦後70年という節目の年ということで、すべてが沖縄戦に関連した講演・報告となっており、70年前の沖縄は八重山の島々から山原の山奥まで、どこへ行っても逃げ場のない悲惨な状況だったのだと痛感しました。

南風原陸軍病院の壕内の臭い再現は、新聞やテレビなどニュースで取り上げられていたこともあります。どのようなものが嗅いでみたいと思っていましたが、「暗くジメジメした狭い壕内で嗅いでこそ本当の意味がある、五感を使って戦争というものを考えてほしい」との意向で、壕以外からの持ち出しはしていないとのことでした。

最後に事務局から「この講演をとおして戦争と平和について深く考えてほしい、そして現在残されている戦争遺跡が、最後の戦争遺跡になるように願いたい。同じ過ちを繰りかえし、大切な命の継承が二度と断ち切られることのないように、今を担っている私たちが過去の事実をしっかりと学び、伝えていくことを実践しなければならない」と締めくくりました。



## 2、沖縄県地域史協議会2015年度 第2回研修会

10月29日（木）沖縄県地域史協議会第2回研修会へ参加してきました。今回の開催地はお隣の宮古島市、1日目は宮古島市中央公民館での報告・講演でした。報告の内容は報告Ⅰ「宮古島戦争遺跡調査結果」山口直美氏、報告Ⅱ「沖縄戦に関する米公文書について」戸部和夫氏でした。米国国立公文書館が所有している沖縄戦についての記録は細部にわたって詳しく書かれた貴重な資料が数多く残されているが、年々劣化が進んでおり早めの調査研究が望まれるとのことでした。また、宮古島市は圃場整備事業などの開発が進む中で戦争遺跡が毎年相次いで発見されており、現在は詳細な戦争遺跡調査や小冊子の作成を行なっているとの報告がありました。

続いて「戦時下における二重の苦悩」と題し、講師にハンセン病と人権市民ネットワーク・知念正勝氏、南静園退所者の会・上里 榮氏をお迎えしての講演がありました。1907年に始まった国のハンセン病隔離政策は1996年にその法的根拠であった「らい予防法」が廃止されるまでおよそ90年続き、宮古島には1931年にハンセン病療養所「県立宮古保養院」が開院したそうです。講師のお二人はその療養所を退所された方で、「治療らしい治療もなく療養所と言うより隔離、根絶を目的とした施設に近く、入所者は子どもを生み育てることが許されず強制断乳や墮胎が行なわれていました。園内には火葬場と納骨堂があり、死んだ後でも帰ることができない終生隔離政策が浸透していました」、また「戦時中は空襲で南静園は壊滅状態となり、職員は職場を放棄して逃げ帰ったが、入所者は行くあてがなく雑木林に避難し、治療薬も食べ物もないまま栄養失調やマラリアで110名が亡くなつた」と当時の様子を生々しく語っていました。最後に「入所者の平均年齢も84歳を超え偏見、差別による被害の歴史を語り継承していくことが困難となっていました、南静園から退所し社会復帰をしている人は約60名おりますが、カミングアウトしているのは我々2人だけです、もっとハンセン病の歴史について学び真の社会復帰ができるように見えない壁を越えていきましょう」と締めくくりました。

2日目の日程は宮古島市内に残る戦争遺跡巡見でした。前日の講演にもあった宮古南静園には、職員宿舎が空襲を受けた際にできた銃弾痕が無数に残されていました。その後、スザランミ特攻艇秘匿壕、ピンフ嶺の野戦重火器砲壕、海軍313設営隊の地下壕群の順で巡見しました。

今年度は戦後70年ということもあり5月に行なわれた第1回に続き第2回の研修会も戦争に関するものが主だった内容となっていました。宮古島研修会すべての日程を終え、空港へ行く前に先日開通したばかりの伊良部大橋へ立ち寄ってもらいました。真新しい3,540mの巨大な橋を眺め、私たち沖縄県地域史協議会も過去と未来を繋ぐ橋となり、平和への架け橋も築いて行こうと熱く語り合い2015年度の研修会を終えました。



## 波照間島のミョウクチエ

波照間島にはビテヌワーと呼ばれる御嶽が集落から離れて3カ所あり、それぞれマートリワー、アバティワー、シィサバルワーと呼ばれ最も神高いと言われている。御嶽といつても鳥居や拝殿や香炉もなく鬱蒼とした森全体が聖域となっている。このビテヌワーには普段は立ち入ることが厳しく禁じられているが、旧暦の10月、2月、5月と年に3回あるミョウクチエという神行事のときは神様が通る道を清掃するため、このビテヌワーへ立ち入ることが許されている。

昨年の5月ミョウクチエは残念ながら台風9号の影響で船便が欠航したため参加ができなかったが、12月22日に行なわれた10月ミョウクチエには参加することが出来た。

午前9時、島の南側にあるマートリワーに向かった。畑の小道を抜けた御嶽の入口には生のニンニクが3個と神酒、塩が供えられていた。その側には草刈機や鎌、ノコギリなどが置かれており、すでに清掃は終わった後のようだった。この時期はキビ刈で忙しく、夜が明けた頃から作業に取りかかって早めに済ませたとのことだった。夏場に襲来する台風後に初めて行なわれる10月ミョウクチエは特に重労働だそうだ。

清掃された御嶽の道を15分ほど歩いていくと神道から少し外れた場所に、高さ70cm幅1mほどの琉球石灰岩の裂け目があった。頭上に気をつけて潜り抜けたその奥は薄暗く足場の悪い斜面が下のほうへ続いており、20mほど降りていったところにコバルトブルーに透き通った湖が現われた。この湖はスーインと呼ばれ、奥のほうで二股に分れ海と繋っており潮の干満によって水位が変化するそうだ。鍾乳洞のような薄暗い石灰岩の割れ目の奥深くに差し込んできた光で青く輝く湖はとても神秘的な感じを受けた。

次に向ったシィサバルワーもニンニク、神酒、塩が供えられ、綺麗に整備されていた。伐採された御嶽内の神道をしばらく進むと、直径10cm、高さ10m程の細長く真っ直ぐな木が数十本生えていた。この木はクロボウモドキと言って、シィサバルワーの一部分と西表島の数箇所、そして台

湾の蘭嶼島だけで確認されている希少な植物だ。環境省のレッドリストでは絶滅の危機に瀕している種として、イリオモテヤマネコやカンムリワシと同様に最高ランクの絶滅危惧IAに位置づけられている。

シィサバルワーには大きな洞窟があり、奥のほうは暗くなつて天井や壁面には鍾乳石も多数見られた。洞窟内を懐中電灯で照らすと、地面にはコウモリの糞や死骸が長い年月をかけて化石化した、天然有機質肥料のグアノが堆積しており、天井にはコウモリの群れも確認することができた。環境省のレッドリストには、絶滅のおそれのある地域個体群に「波照間島のカグラコウモリ」も掲載されている。

また、洞窟内は温度や湿度が一定で糸紡ぎや機織をするのに適していたため、人頭税時代にはこの洞窟で布を織っていたとの伝承が残っている。実際に入口付近にはその遺構と見られる石積みが左右4列ずつ残っていた。その他にも八重山キリシタン事件の際、波照間島へ島流しにされた人々が洞窟内で隠れて何んだと伝わるマリア様の人形と呼ばれる鍾乳石があるというが、残念ながら今回は確認することができなかつた。

ビテヌワーは波照間島の人々が古くから最高の聖地として御嶽内への入域を禁じ、樹木の伐採なども厳しく制限していたため現在まで大切に残されてきたものと思われる。土地改良がすすみ、原風景が少なくなった現在、その信仰を大切にすると同時に波照間島の植物相や自然を理解するための場所として重要な意味を見いだすことができる。



# イリオモテヤマネコ新聞記事表題一覧

2015年はイリオモテヤマネコ発見50年の節目にあたり4月15日がヤマネコの日に制定された。イリオモテヤマネコ発見50年記念事業実行委員会が設立され、ヤマネコシンポジウムなど様々な催しが開かれた。本表では石垣市立図書館新聞検索システムを活用して「ヤマネコ」のワードで検索した結果と、「『沖縄島嶼研究7号』の「イリオモテヤマネコに関する文献目録」を参照し、竹富町史所蔵ファイルの中から「イリオモテヤマネコ」に関する新聞記事を拾い集めて作成した。

No.	年	月 日	新聞名	見出し
1	1965年(S40)	2月 9日	八重山毎日	西表中心に小説化 作家の戸川氏
2	1965年(S40)	2月16日	八重山毎日	近代化にびっくり もっとPRに力を 動物作家の戸川氏来島
3	1965年(S40)	3月 1日	八重山毎日	〈記者席〉戸川・清村氏西表西部に同情
4	1965年(S40)	3月 6日	八重山毎日	〈記者席〉西表の山ネコを天然記念物に
5	1965年(S40)	3月 9日	八重山毎日	24年前の思い出 皆既日食の取材に来て 戸川氏両高校生への講演から
6	1965年(S40)	3月10日	八重山毎日	24年前の思い出 皆既日食の取材に来て 戸川氏両高校生への講演から
7	1965年(S40)	3月16日	八重山タイムス	世界の大発見 西表山ネコ野生生物
8	1965年(S40)	3月17日	八重山タイムス	世界の注目あびる 西表の山ネコ
9	1965年(S40)	3月17日	八重山朝日	西表に珍ネコ 本土学界が更に調査研究
10	1965年(S40)	4月 18日	八重山毎日	西表島のヤマネコは新種 今泉博士が世界的発見と折紙
11	1965年(S40)	5月 7日	八重山毎日	南援から三百冊の図書 戸川氏自著の本も 八重山図書館に贈る
12	1965年(S40)	5月29日	八重山新聞	山ねこ生捕りに 戸川氏近く来島
13	1965年(S40)	6月 3日	八重山毎日	戸川氏再び来島 五日高良氏らと西表へ
14	1965年(S40)	6月 5日	八重山毎日	ヤマネコの生態調査で高良教授や報道陣から
15	1965年(S40)	6月 5日	八重山毎日	ネコ捕獲の七道具
16	1965年(S40)	6月 6日	八重山毎日	西表ヤマネコと戸川作家
17	1965年(S40)	6月 8日	八重山毎日	二日目にフン発見西表ヤマネコ調査閉 地上以上に困難 慎重な捕獲方法
18	1965年(S40)	6月 8日	八重山朝日	捕獲は時間の問題か ヤマネコ部隊ジャンブルへ
19	1965年(S40)	6月12日	八重山毎日	高良教授ら、ぐんばえむしを発見 未登録の珍種か
20	1965年(S40)	6月15日	八重山毎日	〈イリオモテヤマネコ調査同行記〉(上) 大陸ネコの元祖か
21	1965年(S40)	6月16日	八重山毎日	〈イリオモテヤマネコ調査同行記〉(中) くり船で奥へ奥へ
22	1965年(S40)	6月17日	八重山毎日	〈イリオモテヤマネコ調査同行記〉(下) 犬先頭に崎山村へ
23	1965年(S40)	6月22日	八重山毎日	戸川氏、イリオモテヤマネコの骨格を採取
24	1965年(S40)	6月24日	八重山毎日	来春本格的な調査団 西表の文化財保護を
25	1965年(S40)	6月24日	八重山朝日	文化財指定の方針 海島、繁殖地の保護のため
26	1965年(S40)	7月 2日	八重山毎日	“八重山の自然と山ネコ” 戸川氏がきょう文館で講演
27	1965年(S40)	7月 2日	八重山朝日	山ねこの調査講演会 文館ホールで開催
28	1965年(S40)	7月 3日	八重山毎日	ヤマネコの島を全国へ 戸川氏、来春再び今泉博士らとともに
29	1965年(S40)	7月 4日	八重山毎日	〈記者席〉小年度長さすが戸川氏
30	1965年(S40)	7月 9日	八重山朝日	西表で怪びよう捕らえる 家ねこの二倍の大きさ
31	1965年(S40)	7月17日	八重山毎日	ひらかれた処女地の島々 戸川幸夫 (1)
32	1965年(S40)	7月18日	八重山毎日	ひらかれた処女地の島々 戸川幸夫 (2)
33	1965年(S40)	7月20日	八重山毎日	ひらかれた処女地の島々 戸川幸夫 (3)
34	1965年(S40)	7月21日	八重山毎日	八重山を大々的にPR 駆京の戸川幸夫氏
35	1965年(S40)	7月21日	八重山毎日	ひらかれた処女地の島々 戸川幸夫 (4)
36	1965年(S40)	7月22日	八重山毎日	ひらかれた処女地の島々 戸川幸夫 (5)
37	1965年(S40)	10月 6日	八重山朝日	天然記念物の指定に 西表ヤマネコと海鳥 高良教授が文保委に訴え
38	1965年(S40)	11月 7日	八重山毎日	〈読者の声〉やまねこの島
39	1966年(S41)	2月12日	八重山毎日	原始の島西表島 戸川幸夫氏の“野生の旅” 発刊
40	1966年(S41)	4月 7日	八重山朝日	遺がいを発見確認 西表の山ネコ 今後はいけどりに全力
41	1966年(S41)	12月 6日	八重山毎日	仲間川で西表ヤマネコ捕獲
42	1966年(S41)	12月 7日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの別種か 頭から尾に数本の筋
43	1966年(S41)	12月16日	八重山毎日	イリオモテヤマネコと判定 本土学界では大きな期待
44	1966年(S41)	12月17日	八重山朝日	西表のヤマネコ 今泉博士 国際承認手続きへ
45	1967年(S42)	1月 1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコは今世紀最大な発見 西表ジャングルを保護区に
46	1967年(S42)	1月 7日	八重山毎日	再びイリオモテヤマネコを生け捕る 黒島さんのしきた落とし穴に落ちる
47	1967年(S42)	1月 7日	八重山朝日	イリオモテヤマネコ二度目の捕獲に成功
48	1967年(S42)	1月 8日	八重山毎日	「やっと安心した」とイリオモテヤマネコを捕獲した黒島さんが語る
49	1967年(S42)	1月14日	八重山毎日	竹富の花城さんが教育委に剥製にして教材に役立ててとイリオモテヤマネコを贈る
50	1967年(S42)	1月14日	八重山朝日	イリオモテヤマネコ花城さんが捕獲 学研の資料用として寄贈
51	1967年(S42)	1月25日	八重山毎日	大原でメスのイリオモテヤマネコが生け捕られた
52	1967年(S42)	2月 3日	八重山朝日	イリオモテヤマネコ天然記念物に指定 文保委乱獲防ぐ
53	1967年(S42)	2月10日	八重山朝日	天然記念物にイリオモテヤマネコ 名稱など指定へ
54	1967年(S42)	2月11日	八重山毎日	八重山署がイリオモテヤマネコを不法に捕獲しないように捕獲者に特別許可勧告
55	1967年(S42)	2月16日	八重山朝日	西表島を総合調査 東京農大探検部 来月の初めに来沖
56	1967年(S42)	2月28日	八重山朝日	十一日西表の動物相調査 生態など総合的に ヤマネコの保護対策も
57	1967年(S42)	2月28日	八重山朝日	西表島縦断踏査 東京農探検部が来島
58	1967年(S42)	3月 4日	八重山朝日	動植物相、人文など究明 西表島に学術のメス 東京農大立命館大が調査に乗り出す
59	1967年(S42)	3月14日	八重山毎日	琉球の高良教授らが来島し、西表の動物相を調査へ 特にイリオモテヤマネコを調査
60	1967年(S42)	3月16日	八重山毎日	国立科学博物館がイリオモテヤマネコを購入したが、飼養許可に問題あり、また
61	1967年(S42)	3月18日	八重山毎日	町がイリオモテヤマネコを西表開発に利用したと学会が怒る
62	1967年(S42)	3月18日	八重山毎日	竹富町に保護されたイリオモテヤマネコが逃げ出し、ひと騒ぎ
63	1967年(S42)	3月20日	八重山毎日	イリオモテヤマネコは町の厚意で学界の手へ オスメス一対でデータが期待される
64	1967年(S42)	3月21日	八重山毎日	〈話題前線〉世界的に有名なイリオモテヤマネコ

65	1967年(S42)	3月23日	八重山毎日	イリオモテヤマネコは元気に東京入り、戸川氏が委嘱飼育
66	1967年(S42)	3月28日	八重山毎日	時ならぬヤマネコ騒動 羽田空港で報道陣のフラッシュ攻め
67	1967年(S42)	3月16日	八重山朝日	イリオモテヤマネコ近く本土学界へ寄贈 竹富町が飼養中
68	1967年(S42)	3月31日	八重山朝日	島の新種十七を確認 東京農大探検部 西表島縦断で成果
69	1967年(S42)	4月24日	八重山毎日	今泉博士が「イリオモテヤマネコはもっとも原始的種族」と発表
70	1967年(S42)	4月27日	八重山朝日	西表島の動物相 保護保存の対策が必要 高良鉄夫(1)
71	1967年(S42)	4月28日	八重山朝日	西表島の動物相 毒工サで天敵も減る 高良鉄夫(2)
72	1967年(S42)	5月5日	八重山朝日	近く原記載を出版 今泉博士の研究成果
73	1967年(S42)	5月5日	八重山朝日	西表島の動物相 興味ある在来トラネコ 高良鉄夫(3)
74	1967年(S42)	5月6日	八重山朝日	西表島の動物相 代表鳥はカンムリワシ 高良鉄夫(4)
75	1967年(S42)	5月7日	八重山毎日	文化財保護委員が仲の神島とイリオモテヤマネコを天然記念物に指定
76	1967年(S42)	5月10日	八重山朝日	西表島の動物相 密林にセマルハコガメ 高良鉄夫(5)
77	1967年(S42)	5月22日	八重山毎日	東京のイリオモテヤマネコは水浴びを好み、犬にもなれる
78	1967年(S42)	6月19日	八重山毎日	国立科学博物館の今泉博士がイリオモテヤマネコを新種と国際的に認める
79	1967年(S42)	7月20日	八重山朝日	西表島を調査 立命館大探検隊一行二十二人
80	1967年(S42)	7月23日	八重山毎日	天皇陛下、西表ヤマネコの調査、飼育に尽力した戸川氏へ感謝
81	1967年(S42)	7月23日	八重山朝日	陛下、戸川氏へ感謝 西表ヤマネコのスライド献上で
82	1967年(S42)	7月27日	八重山朝日	高良琉球大教授ら六人 西表動物相調査団メンバー
83	1969年(S44)	8月6日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、理由問わず捕獲禁止 政府から竹富町へ通達
84	1971年(S46)	1月27日	八重山毎日	琉球政府の天然記念物・イリオモテヤマネコを撃ち殺す 犬飼、文保法疑いで取調
85	1971年(S46)	2月6日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、犬に襲われる 営林署が犬の放し飼取り締まりへ
86	1971年(S46)	2月15日	八重山毎日	畜産指導所で犬に襲われ負傷のイリオモテヤマネコ飼育 食事の世話で手をやく
87	1971年(S46)	2月20日	八重山毎日	〈さぼてん〉畜産指導所、イリオモテヤマネコのエサ確保など振り回される
88	1971年(S46)	2月26日	八重山毎日	〈さぼてん〉畜産指導所のイリオモテヤマネコ、琉大の学術研究資料として那覇へ
89	1972年(S47)	4月1日	八重山毎日	文部省の文化財保護審議会で八重山の重文、記念物決まる イリオモテヤマネコなど・・・
90	1972年(S47)	4月11日	八重山毎日	(不連続線) 八重山関係でイリオモテヤマネコやカンムリワシを指定
91	1973年(S48)	1月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ(リオとモコの年賀状) ジャングル出て5年
92	1973年(S48)	6月10日	八重山毎日	〈さぼてん〉東京・大久保の国立科学博物館で飼育のイリオモテヤマネコ1匹が死亡
93	1973年(S48)	10月17日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ優先の離島行政に不満 西表東部の住民代表3人が記者会見
94	1973年(S48)	10月19日	八重山毎日	(不連続線) 西表東部の代表らが記者会見、イリオモテヤマネコ優先の行政に不満
95	1973年(S48)	11月11日	八重山毎日	西表横断道路、工事継続はイリオモテヤマネコの厚い壁に…瀬戸町長が帰任談
96	1973年(S48)	11月22日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの生態予備調査 来月八日から今泉博士らがドイツ学者と
97	1973年(S48)	11月25日	八重山毎日	「西表横断道路と自然保護」住民の権利が阻害、ヤマネコに負けるな竹富町長
98	1973年(S48)	11月25日	八重山毎日	ヤマネコに負けるな竹富町長 住民の権利が阻害 西表縦断道路と自然破壊
99	1973年(S48)	12月18日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、予想下回る生息数か?日本とドイツの学者の合同調査類調
100	1974年(S49)	1月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが切手に 邮政省が自然保護シリーズ第一集
101	1974年(S49)	1月5日	八重山毎日	(記者席) 西表島の自然保護をヤマネコ研究の学者諸氏に現地住民の声書面で陳情
102	1974年(S49)	3月5日	八重山毎日	(人間もヤマネコも西表島の自然を守る思想)
103	1975年(S50)	1月21日	八重山毎日	西表祖納と星立の間でイリオモテヤマネコの死体発見、鑑定、標本のために琉大へ贈る
104	1975年(S50)	3月20日	八重山毎日	船浮でイリオモテヤマネコを捕獲 琉教育庁が引き取る
105	1975年(S50)	4月13日	八重山毎日	(不連続線) 毎日放送の「野生の王国」で日本各地の野生生物を紹介、西表も登場
106	1975年(S50)	5月23日	八重山毎日	〈さぼてん〉なんとかできない?船浮地区にイリオモテヤマネコが頻繁に出没
107	1975年(S50)	9月10日	八重山毎日	東大大学院らの研究グループが初の試写会 イリオモテヤマネコの野生の姿克明に
108	1976年(S51)	6月1日	八重山毎日	(読書) イリオモテヤマネコ=初の映画撮影の成功で話題をよぶ=
109	1976年(S51)	12月12日	八重山毎日	文化財保護審議会 イリオモテヤマネコなどの特別天然記念物指定で答申
110	1977年(S52)	2月15日	八重山毎日	生きた化石イリオモテヤマネコ、1千年前から生息、今泉博士らが分析
111	1977年(S52)	11月23日	八重山毎日	自然破壊をくい止めよ 世界的に大きな損失
112	1978年(S53)	2月1日	八重山日報	「イリオモテヤマネコ」の保護を、エジンバラ公が皇太子に手紙
113	1978年(S53)	2月2日	八重山日報	〔社説〕「ヤマネコ」保護の書簡
114	1978年(S53)	2月6日	八重山日報	下田正夫:環境庁に訴える 烏鵲保護区設定の中止を望む
115	1978年(S53)	2月7日	八重山日報	〔社説〕住民生活と自然保護
116	1978年(S53)	2月12日	八重山毎日	〔記者席〕人間保護区をつくるべきだ
117	1978年(S53)	2月12日	八重山毎日	人間優先の政治強く要請 竹富町臨時議会で決議
118	1978年(S53)	2月16日	八重山日報	環境庁 保護区設定見送る
119	1978年(S53)	2月16日	八重山日報	〔記者の目〕ヤマネコにエサを
120	1978年(S53)	2月16日	八重山毎日	西表の鳥獣保護区設定諮詢見送る
121	1978年(S53)	2月21日	八重山日報	鳥獣保護区設定に反対
122	1978年(S53)	2月21日	八重山日報	鳥獣保護区設定に反対集会
123	1978年(S53)	2月22日	八重山毎日	住民福祉優先の政策を
124	1978年(S53)	3月9日	八重山日報	住民生活との両立を山田長官が町長に約束
125	1978年(S53)	3月22日	八重山日報	「イリオモテヤマネコ」神秘の生態、16ミリに写す 意外!!木登りが得意
126	1978年(S53)	4月7日	八重山日報	イリオモテヤマネコ増殖事業スタート
127	1978年(S53)	6月13日	八重山日報	イリオモテヤマネコの生態数、わずか15~20頭 数年内に絶滅の恐れ
128	1978年(S53)	6月29日	八重山毎日	人間優先に鳥獣保護
129	1978年(S53)	11月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ生体観察へ 西表島の琉大熱研へ移す
130	1978年(S53)	11月29日	八重山日報	イリオモテヤマネコ、琉大から西表島へ7年余ぶりに“里帰り”
131	1978年(S53)	12月23日	八重山毎日	西表東西地区に給餌施設
132	1979年(S54)	4月7日	八重山日報	環境庁がイリオモテヤマネコの増殖事業スタート 年間ニワトリ二千羽を給餌
133	1979年(S54)	5月5日	八重山毎日	今年から給餌作戦
134	1979年(S54)	5月8日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ給餌調査庭が来島
135	1979年(S54)	5月12日	八重山毎日	西表東西に六ヶ所の餌場
136	1979年(S54)	6月17日	八重山毎日	行き倒れのイリオモテヤマネコの子ネコを発見 リレーで沖縄子供の国へ移す
137	1979年(S54)	6月17日	八重山日報	西表東部・美原地区でヤマネコの赤ん坊を保護 生後約20日、体長25センチ

138	1979年(S54)	6月28日	八重山日報	船浦・琉大研究施設で飼育中のイリオモテヤマネコ死ぬ
139	1979年(S54)	7月28日	八重山日報	〈特別展「八重山の自然」を見る〉(4) イリオモテヤマネコ
140	1979年(S54)	8月31日	八重山日報	〈山マユとトトラー〉私は見た！イリオモテヤマネコは二種いる
141	1979年(S54)	9月4日	八重山日報	〈社説〉ヤマネコと西表開発
142	1979年(S54)	9月8日	八重山毎日	1日から実施の予定 イリオモテヤマネコ給餌作戦
143	1979年(S54)	10月14日	八重山毎日	〈声〉イリオモテヤマネコの早期帰還運動を
144	1979年(S54)	10月23日	八重山日報	ヤマネコ絶滅に歎止め 27日から人工給餌作戦へ
145	1979年(S54)	10月23日	八重山毎日	25日から給餌を始める 環境庁イリオモテヤマネコに
146	1979年(S54)	10月26日	八重山日報	イリオモテヤマネコの人工給餌作戦スタート 西表にニワトリ70羽輸送
147	1979年(S54)	10月30日	八重山日報	イリオモテヤマネコの人工給餌作戦、ニワトリを食べず、関係者は首ひねる
148	1979年(S54)	11月3日	八重山毎日	西表国立公園管理事務所、ヤマネコの給餌は成功、足跡も発見できる
149	1979年(S54)	11月3日	八重山日報	イリオモテヤマネコの給餌作戦、ニワトリを食べた！ようやく軌道にのる
150	1979年(S54)	11月28日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの給餌作戦、3割程度工サたべる
151	1979年(S54)	12月5日	八重山毎日	ヤマネコの被食は効果あける
152	1979年(S54)	12月6日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの餌 にわとり70羽送る
153	1980年(S55)	1月8日	八重山日報	イリオモテヤマネコ増殖に期待大、軌道に乗った給餌作戦で関係者は大きな自信
154	1980年(S55)	1月27日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの保護と人間環境の調和問題調査のため来島 住民と話し合う
155	1980年(S55)	1月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの調査團が記者会見 ヤマネコの保護は、地元の協力が必要
156	1980年(S55)	1月29日	八重山日報	近藤九大教授ら研究グループのイリオモテヤマネコ現地調査終わる
157	1980年(S55)	4月4日	八重山毎日	（指笛）ヤマネコと核燃料処理工場
158	1980年(S55)	4月24日	八重山日報	八親協土産品部会の委託を受けて研究、池城さんの作品、木彫りのヤマネコが完成
159	1980年(S55)	11月2日	八重山毎日	石垣金星 ヤママヤーの怒り
160	1980年(S55)	11月28日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの給餌作戦、3割程度工サたべる
161	1981年(S56)	1月31日	八重山毎日	犬にかまれる？網取てイリオモテヤマネコ死ぬ
162	1981年(S56)	2月1日	八重山毎日	問われるイリオモテヤマネコ保護対策 大害などからどう守るか
163	1981年(S56)	2月19日	八重山毎日	竹富町文化財審議会「ヤマネコ」の保護対策で町へ創い犬主の指導強化を要請
164	1981年(S56)	2月19日	八重山日報	竹富町文化財審議委員会 イリオモテヤマネコの咬殺で飼い犬管理の指導要請
165	1981年(S56)	2月26日	八重山毎日	舟浮部落でガチョウの被害相次ぐ イリオモテヤマネコが犯人？
166	1981年(S56)	3月11日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、カニ取り網にかかり死ぬ 関係者、相次ぐ事故にショック
167	1981年(S56)	3月12日	八重山日報	イリオモテヤマネコまた死ぬ 白浜のマンゴープ林でカニ取り網に入り溺れる
168	1981年(S56)	3月21日	八重山毎日	県への引き渡し拒め へい死のイリオモテヤマネコで竹富町文保審が検討
169	1981年(S56)	3月24日	八重山毎日	竹富町議会、新年度予算など可決し閉会 イリオモテヤマネコの返還要請も
170	1981年(S56)	7月18日	八重山日報	イリオモテヤマネコ絶滅の危機感ひしひし…環境庁、街付けから人工繁殖へ
171	1981年(S56)	8月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ人工繁殖へ 環境庁が来年度から実態調査
172	1981年(S56)	11月19日	八重山毎日	イリオモテヤマネコまた事故死
173	1981年(S56)	11月19日	八重山日報	ヤマネコの赤ちゃん哀れ 事故死？ 死体で発見
174	1981年(S56)	11月25日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ 離島総合センターに展示 はく製され一般公開
175	1981年(S56)	12月9日	八重山日報	J博士らが貴重動物の生息で西表を調査 積極的な保護措置を強調
176	1981年(S56)	12月23日	八重山日報	竹富町文化財保護審議委 新種コウモリ繁殖地を町指定とヤマネコ保護標識設置へ
177	1982年(S57)	2月9日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、またニワトリかみ殺す 相次ぐ被害に住民は激怒
178	1982年(S57)	4月11日	八重山毎日	西表の美田良で衰弱のイリオモテヤマネコを保護 元気回復したい山中へ
179	1982年(S57)	6月7日	八重山日報	事実なら今世紀最大のニュース「ヤマビキリヤ」は存在するか 目撃証言が続出
180	1983年(S58)	1月6日	八重山毎日	八日から生息環境の調査 イリオモテヤマネコ三年間の長期計画
181	1983年(S58)	1月8日	八重山毎日	環境庁 イリオモテヤマネコを追跡調査、えさ場も10カ所増やす
182	1983年(S58)	1月9日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの生態、生息状況の調査開始 世界野生生物基金調査団が来島
183	1983年(S58)	1月9日	八重山日報	イリオモテヤマネコ 保護対策で本格的な調査、予備調査班が来島
184	1983年(S58)	1月11日	八重山日報	（社説）新方法でヤマネコ調査
185	1983年(S58)	1月15日	八重山毎日	明日から本格調査 イリオモテヤマネコ調査團現地入り
186	1983年(S58)	1月18日	八重山毎日	世界野生生物基金イリオモテヤマネコ調査団のワナ仕掛け本格調査始まる
187	1983年(S58)	1月18日	八重山日報	イリオモテヤマネコ捕獲作戦本番へ 6カ所に箱ワナ仕掛ける
188	1983年(S58)	1月20日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ調査団、オス1頭を捕獲 電波発信機付け放す
189	1983年(S58)	1月20日	八重山日報	イリオモテヤマネコ調査団 捕獲に成功、テリトリー調査用の電波発信機装着
190	1983年(S58)	1月21日	八重山日報	（社説）ヤマネコの捕獲成功
191	1983年(S58)	1月22日	八重山毎日	（社説）「イリオモテヤマネコの保存」動物たちの環境が保存される配慮を
192	1983年(S58)	1月25日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ調査団、24時間態勢で追跡調査 さらに2頭の雌成獣を捕える
193	1983年(S58)	1月25日	八重山日報	イリオモテヤマネコ追跡調査本番へ 連続して3匹目を捕獲
194	1983年(S58)	3月24日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ生息環境全島調査開始 本格的な保護対策確立へ
195	1983年(S58)	5月5日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ最低12頭の生息確認 薄明薄暮に活動、警戒心薄い
196	1983年(S58)	5月7日	八重山日報	解明されるイリオモテヤマネコの素顔 環境庁追跡調査まとめ 昼夜区別なく行動
197	1983年(S58)	7月9日	八重山日報	イリオモテヤマネコの情報提供を… 生息環境等保全対策調査団が現地説明会開く
198	1983年(S58)	10月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、また人災に…車にひかれ死ぬ
199	1983年(S58)	11月11日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、冬季は長い距離で移動 生息環境等調査で上気調査結果報告
200	1983年(S58)	11月11日	八重山日報	イリオモテヤマネコ生息環境等調査で上期調査結果報告 冬季に広範囲の移動
201	1983年(S58)	12月15日	八重山毎日	〈83ニュース回顧〉(4) イリオモテヤマネコ実態、保護対策など調査
202	1983年(S58)	12月20日	八重山日報	西表・上原で民家のニワトリ殺される 犯人は首輪付ヤマネコ
203	1983年(S58)	12月28日	八重山日報	ようこそ！大阪府の中学生豆記者団19人が来島、西表ヤマネコも取材
204	1984年(S59)	2月14日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのこと (1)
205	1984年(S59)	2月15日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのこと (2)
206	1984年(S59)	2月16日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのこと (3)
207	1984年(S59)	2月17日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのこと (4)
208	1984年(S59)	5月5日	八重山毎日	環境庁、イリオモテヤマネコ生息環境調査結果を発表 同一地で定住性が高い
209	1984年(S59)	5月5日	八重山日報	環境庁まとめ イリオモテヤマネコ、最低17匹の生息確認 高い給餌場の定着性
210	1984年(S59)	5月6日	八重山日報	（社説）成果あげたヤマネコ調査

211	1984年(S59)	8月6日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの生息環境調査で説明会聞く 住民約30人が参加
212	1984年(S59)	9月7日	八重山毎日	雄のイリオモテヤマネコ死ぬ 老衰か病死か、道路わきのU路溝で見つかる
213	1985年(S60)	5月25日	八重山毎日	世界野生生物基金日本委員会が現地調査 イリオモテヤマネコ、島の開発に邪魔
214	1985年(S60)	6月14日	八重山毎日	「新バス会社は必要」ヤマネコ観光、地元住民と懇談会聞く
215	1985年(S60)	8月28日	八重山日報	環境庁 イリオモテヤマネコ、ヤンバルクイナなど南西諸島の鳥獣保護へ
216	1985年(S60)	11月5日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ調査結果を発表 100匹弱が生息、行動形態も明らかに
217	1985年(S60)	11月5日	八重山日報	イリオモテヤマネコ調査最終まとめ 生息頭数は約100頭
218	1985年(S60)	11月6日	八重山日報	(社説) 成果あげた環境庁のヤマネコ調査
219	1985年(S60)	11月16日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ調査報告会聞く 活発な質疑も出る
220	1986年(S61)	1月1日	八重山日報	(西表山猫 およそ百匹が生息 自然回復を促進)
221	1986年(S61)	3月1日	八重山毎日	(土曜レポート) 環境庁が、野生生物の調査に着手 貴重な動植物
222	1987年(S62)	6月2日	八重山毎日	ヤマネコ保護に協力を! 西表国立公園事務所“パンプ”で呼びかけへ
223	1987年(S62)	6月15日	八重山日報	西表ヤマネコの保護パンフ発行 西表国立公園管理事務所
224	1987年(S62)	12月22日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ今後も返還要請
225	1987年(S62)	12月26日	八重山毎日	立看、標識で注意喚起へ イリオモテヤマネコ交通事故死で対策
226	1987年(S62)	12月28日	八重山日報	イリオモテヤマネコ保護する為立看と標識設置をし、ドライバーに注意を喚起する
227	1988年(S63)	1月8日	八重山日報	西表の上原で国の天然記念物のイリオモテヤマネコを捕獲した
228	1988年(S63)	1月22日	八重山毎日	西表東部でイリオモテヤマネコの事故死相次ぐ 運転者に注意呼びかける
229	1988年(S63)	2月26日	八重山日報	環境庁と竹教委がイリオモテヤマネコを保護するため看板を設置
230	1988年(S63)	4月17日	八重山日報	ヤマネコの事故防止用たて看24本設置
231	1988年(S63)	4月17日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの輪禍防止へ
232	1988年(S63)	4月19日	八重山毎日	イリオモテヤマネコを事故から守ろうと立看板で注意喚起
233	1988年(S63)	11月21日	八重山日報	イリオモテヤマネコ台湾にも生息?
234	1988年(S63)	11月24日	八重山日報	イリオモテヤマネコは台湾にも生息するか
235	1989年(H1)	2月1日	八重山日報	イリオモテヤマネコが今年に入り4匹死亡 求められる自然環境の保全
236	1989年(H1)	4月5日	八重山毎日	保護されたイリオモテヤマネコに発信器付け放す
237	1989年(H1)	6月3日	八重山日報	(ヤマネコを守ろう) ステッカーを作成して環境庁と竹富教育委員会が呼びかけ
238	1989年(H1)	6月4日	八重山毎日	イリオモテヤマネコを交通事故から守ろう ステッカーで呼びかけ
239	1990年(H2)	2月24日	八重山日報	ヤマネコ資料館建設も ふるさと創生アイデアまとまる
240	1990年(H2)	3月8日	八重山毎日	ことしは食糧難か? イリオモテヤマネコ チャボをかみ殺す
241	1990年(H2)	11月20日	八重山毎日	講座ヤマネコの島は宇多良川炭坑村跡を探検、教師、一般住民等多数が参加した
242	1991年(H3)	8月1日	八重山日報	わ~いヤマネコだ八重山諸島の自然展好評
243	1991年(H3)	8月31日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが減ったか増えたか8年ぶりに生態調査
244	1991年(H3)	10月2日	八重山日報	環境庁が初の総合対策立案へ 野生動植物の保護対策詔問
245	1991年(H3)	12月5日	八重山毎日	イリオモテヤマネコがバスにはねられ死ぬ
246	1992年(H4)	1月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが事故、病死相次ぐ 二月で5頭が死ぬ
247	1992年(H4)	2月14日	八重山毎日	大富でヤマネコが民家に侵入 オスの成ネコ保護し首輪と発信機装着
248	1992年(H4)	2月21日	八重山毎日	環境庁が絶滅防止へ宝案 貴重な野生生物を本格保護
249	1992年(H4)	2月26日	八重山毎日	自然環境保全審議会が答申 野生生物の絶滅防止を
250	1992年(H4)	3月1日	八重山毎日	ユニークな立看を寄贈! 西表島交通が交通安全で ヤマネコカンムリワシを標語に
251	1992年(H4)	3月27日	八重山毎日	(貴重な野生生物の絶滅阻止) 捕獲、輸出入など禁止、 新法案の今国会提出決まる
252	1992年(H4)	7月9日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ増殖へ 西表の野生生物保護センター建設ほぼ決定
253	1992年(H4)	10月16日	八重山日報	沖縄子どもの国で国内では唯一、飼育のケイ太イリオモテヤマネコが死ぬ
254	1992年(H4)	10月17日	八重山毎日	ちきだぎ (21) さようならケイ太・イリオモテヤマネコ
255	1993年(H5)	4月17日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ保護アピール 環境庁がステッカー作成
256	1993年(H5)	4月17日	八重山日報	イリオモテヤマネコ保護のためのステッカー
257	1993年(H5)	4月26日	八重山毎日	西表自然観察会でイリオモテヤマネコの足跡やふん探しも
258	1993年(H5)	5月1日	八重山毎日	(土曜レポート) イリオモテヤマネコによる家畜被害 除草用のアガモなど襲う
259	1993年(H5)	6月6日	八重山毎日	石垣市地方合同庁舎でイリオモテヤマネコ生態調査報告などが行なわれた
260	1993年(H5)	10月8日	八重山毎日	イリオモテヤマネコを環境庁が国内希少野生動植物に指定 捕獲や譲渡を法律で禁止
261	1993年(H5)	10月8日	八重山日報	環境庁が保護対象の希少野生動植物でイリオモテヤマネコなど6種類
262	1993年(H5)	11月10日	八重山日報	イリオモテヤマネコご用 西表西部でアガモ、鶴の被害相次ぐ
263	1993年(H5)	12月5日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ被害、農家と関係機関が協議 要請や実態調査を確認
264	1993年(H5)	12月8日	八重山日報	イリオモテヤマネコによるアガモ被害、行政レベルで検討へ
265	1994年(H6)	1月25日	八重山毎日	イリオモテヤマネコを希少動物に指定 政府の事務次官会議で政令改正案内定
266	1994年(H6)	3月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコまたも輪禍に 重症で石垣に移送、右足切断
267	1994年(H6)	3月30日	八重山毎日	右足切断のイリオモテヤマネコ やや体力を回復
268	1994年(H6)	4月20日	八重山毎日	野生生物保護センターが着工、巣かに起工式を行なう ヤマネコの保護増殖へ
269	1994年(H6)	4月22日	八重山毎日	「最後の学徒兵」の著者、フリーライターの森口裕さん、ヤマネコ問題を取材
270	1994年(H6)	5月21日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ保護増殖分科会 アガモ被害対策示す、実験的にネット設置
271	1994年(H6)	6月19日	八重山毎日	「ヤマネコの保護設定を」IBC 講演で坂口氏が環境保全策など提起
272	1994年(H6)	6月19日	八重山日報	イリオモテヤマネコ保護区の設定が必要 環境文化講演で強調
273	1995年(H7)	2月21日	八重山毎日	西表船浦でイリオモテヤマネコが犬にかみ殺される バイン焼で3頭が襲う
274	1995年(H7)	2月21日	八重山日報	西表船浦でイリオモテヤマネコが狩猟犬にかみ殺される 4頭の犬が襲う
275	1995年(H7)	2月22日	八重山毎日	再発防止で対応協議へ 竹富町や保健所がイリオモテヤマネコ事故で
276	1995年(H7)	3月9日	八重山日報	イリオモテヤマネコを追う 横浜市在住の横塚眞己さんの写真集が反響呼ぶ
277	1995年(H7)	3月15日	八重山毎日	環境庁がヤマネコ保全で初の現地説明会聞く 催定数は99~110頭
278	1995年(H7)	5月19日	八重山毎日	西表野生生物保護センター運営協議会聞く 7月に開所式、ヤマネコ資料など公開
279	1995年(H7)	7月12日	八重山毎日	西表のワイルドライフセンターがオープン イリオモテヤマネコ保護・増殖の拠点
280	1995年(H7)	7月13日	八重山日報	西表野生生物センター開所 増殖事業や調査研究実施
281	1995年(H7)	7月13日	八重山毎日	西表野生生物保護センター開所 イリオモテヤマネコを放し飼いへ

282	1995年(H17)	9月4日	八重山毎日	西表野生生物保護センター 一ヵ月余で2300人が来場、ヤマネコで誤解も
283	1995年(H17)	11月27日	八重山毎日	西表野生生物保護センターが「生き物掲示板」を設置 ヤマネコなどの目撃情報などを紹介
284	1995年(H17)	12月14日	八重山日報	竹議会一般質問 広域事業で慰安室設置へ イリオモテヤマネコ調査に地元反発
285	1995年(H17)	12月21日	八重山毎日	(不連続線)「イリオモテヤマネコ」貴重なヤマネコを事故から守ろう
286	1995年(H17)	12月21日	八重山日報	ヤマネコ「ストップ・ザ・輪禪」防止キャンペーン展開 今年すでに3匹死亡
287	1995年(H17)	12月23日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの事故防止を 環境庁がキャンペーン。住民に説明会開く
288	1996年(H18)	2月26日	八重山毎日	繁殖地に異変? 冬鳥来ない イリオモテヤマネコに影響も
289	1996年(H18)	3月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ交通事故防止標語 優秀賞に下地秀治さん(白浜中)
290	1996年(H18)	3月3日	八重山日報	西表ヤマネコ交通事故防止キャンペーンの人選標語を表彰、下地君が優秀賞
291	1996年(H18)	4月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの交通事故防止キャンペーンを実施、期間中の交通事故死ゼロ
292	1996年(H18)	5月10日	八重山日報	企画展「八重山の自然」イリオモテヤマネコの剥製も展示
293	1996年(H18)	6月12日	八重山毎日	生き物情報マップを配布 西表で野生生物事務所 ヤマネコ目撃データを集める
294	1996年(H18)	8月9日	八重山毎日	重傷のヤマネコ保護 またも交通事故 過去24頭が人災で死亡
295	1996年(H18)	8月9日	八重山日報	後を絶たない交通事故 イリオモテヤマネコの幼獣 ひん死の重体
296	1996年(H18)	9月13日	八重山毎日	交通事故被害のヤマネコ、西表島のセンターでリハビリ 必死の手当てで回復
297	1996年(H18)	9月13日	八重山日報	交通事故の西表ヤマネコ "元気になりました" 野生復帰めざしリハビリ中
298	1996年(H18)	11月6日	八重山毎日	交通事故でリハビリ中のヤマネコ、本に登る動作がみられるなど回復
299	1996年(H18)	12月13日	八重山日報	「イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン」が展開中、冬季に69%が発生
300	1997年(H19)	2月23日	八重山毎日	野生生物保護センターの坂口さんが、インドネシアでヤマネコの調査技術を指導
301	1997年(H19)	3月12日	八重山日報	イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン 作文募集の結果、15人が入賞
302	1997年(H19)	3月20日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの生息密度は、北岸地域が高い 死亡事故の59%が交通事故
303	1997年(H19)	7月15日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが交通事故で死亡 今年初、27頭目の被害に
304	1997年(H19)	7月15日	八重山日報	予育て中のイリオモテヤマネコのメス親が事故死 1978年以降27頭が輪禪に
305	1997年(H19)	7月24日	八重山日報	イリオモテヤマネコの保護増殖で連絡会発足 国、県、町の関係機関が連携
306	1997年(H19)	8月2日	八重山毎日	野生生物研究所が「交通遺児」のイリオモテヤマネコを保護 推定2ヶ月、衰弱死防ぐ
307	1997年(H19)	8月2日	八重山日報	生後2ヶ月のイリオモテヤマネコを、母親の死後8日に保護
308	1997年(H19)	9月5日	八重山毎日	国、県、竹富町がイリオモテヤマネコの保護増殖会議を結成 生息脅かす3要因に対応
309	1997年(H19)	10月11日	八重山日報	学会調査 半数近い80種、絶滅の危機 イリオモテヤマネコもリストアップ
310	1997年(H19)	12月7日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの交通事故防止キャンペーン実施へ 大原小児童らも演劇で訴え
311	1997年(H19)	12月9日	八重山日報	イリオモテヤマネコを守れ! 交通事故防止でキャンペーン ドライバーの注意喚起
312	1997年(H19)	12月27日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーンで、大原小児童も劇を披露し保護訴え
313	1998年(H20)	3月12日	八重山日報	西表野生生物保護センターで、「イリオモテヤマネコ保護のポスター展」を開催
314	1998年(H20)	4月9日	八重山毎日	南風見白浜線にヤマネコ保護で特殊舗装 八重山支庁、車の通過音をアップ
315	1998年(H20)	6月4日	八重山毎日	イリオモテヤマネコを保護「わな」? て足にけが
316	1998年(H20)	6月4日	八重山毎日	生後2ヶ月で保護、今年2月に野生復帰のイリオモテヤマネコ死亡 死因は不明
317	1998年(H20)	6月4日	八重山日報	イリオモテヤマネコを保護 オスの成獣で左前足を負傷
318	1998年(H20)	6月4日	八重山日報	西表野生生物保護センターから野外復帰したヤマネコ死亡 直接の死因は不明
319	1998年(H20)	6月7日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ負傷団体の保護について
320	1998年(H20)	6月10日	八重山毎日	西表野生生物保護センターで保護のイリオモテヤマネコ死亡
321	1998年(H20)	6月10日	八重山日報	西表野生生物センターで保護のイリオモテヤマネコ、手当てのかいなく死亡
322	1998年(H20)	11月25日	八重山日報	大原の農地開発に待った! ヤマネコ生息地が減少 県と関係四者機関で検討
323	1998年(H20)	12月9日	八重山毎日	やさしい心で通してあげて イリオモテヤマネコの交通事故防止でキャンペーン
324	1998年(H20)	12月12日	八重山毎日	大富土改西工区、新年度予算要求見送り ヤマネコの生息問題で4者協力協議
325	1998年(H20)	12月17日	八重山日報	「やさしい心で通してあげて」、イリオモテヤマネコ事故防止キャンペーン実施
326	1999年(H21)	1月8日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ、昨年の交通事故死はゼロ 広報活動が奏功
327	1999年(H21)	1月22日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ事故防止説明会に大勢の住民集う 生態と保護で活発に質疑
328	1999年(H21)	1月27日	八重山毎日	(社説)「生息数は増えたというが」イリオモテヤマネコの現状と将来
329	2000年(H22)	2月17日	八重山日報	国有林農地開発計画についてヤマネコ生息地で一部縮小
330	2000年(H22)	2月24日	八重山毎日	(FIV(ネコエイズ)からヤマネコを守れ) (上) 野良ネコ数頭に発症
331	2000年(H22)	2月25日	八重山毎日	(FIV(ネコエイズ)からヤマネコを守れ) (下) ウィルス検査の徹底を
332	2000年(H22)	6月23日	八重山日報	イリオモテヤマネコ幼獣保護 残り一頭の情報提供呼びかけ
333	2000年(H22)	6月23日	八重山毎日	ヤマネコの幼獣を保護 別の一頭も親とはぐれる?
334	2000年(H22)	6月28日	八重山毎日	ヤマネコの幼獣死亡 西表干立て衰弱死
335	2000年(H22)	7月29日	八重山日報	ヤマネコ生息地、西表開発の着工見送り
336	2000年(H22)	7月29日	八重山毎日	ヤマネコ保護問題で西表大富の土地改良事業西工区 予算要求を見送る
337	2000年(H22)	11月8日	八重山日報	イリオモテヤマネコを守ろうと竹富町などが避妊・去勢で初の連絡協議会を開催
338	2000年(H22)	11月9日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのFIV感染対策に県獣医師会などが支援へ 環境庁が調整会議
339	2000年(H22)	11月9日	八重山日報	飼い猫の避妊・去勢で初の連絡会議を開催し猫エイズの感染防止へ
340	2000年(H22)	11月11日	八重山毎日	(土曜リポート) イリオモテヤマネコ FIV 対策を県獣医師会が支援
341	2000年(H22)	11月23日	八重山毎日	6月14日から西表野生生物保護センターで治療を受けていたヤマネコの幼獣が死亡
342	2000年(H22)	11月23日	八重山日報	野生生物保護センターでイリオモテヤマネコの幼獣が羽毛を消化管内に詰まらせて死亡
343	2000年(H22)	12月11日	八重山日報	西表島への猫の持ち込み規制へ、ヤマネコ保護のため来年度以降に条例化図る
344	2000年(H22)	12月20日	八重山日報	環境庁などが「やさしい心で通してあげてヤマネコを」と交通事故防止キャンペーン
345	2001年(H23)	1月5日	八重山毎日	ヤマネコが交通事故死 29頭目の犠牲に
346	2001年(H23)	1月18日	八重山毎日	やまねこの幼獣、車にひかれ死ぬ
347	2001年(H23)	1月19日	八重山日報	ヤマネコの事故死相次ぐ
348	2001年(H23)	2月5日	八重山毎日	児童らがイリオモテヤマネコの生態を観察 保護活動を体験
349	2001年(H23)	3月8日	八重山毎日	ヤマネコの猫エイズ感染予防で飼い猫の登録義務化へ 3月議会に条例案提出
350	2001年(H23)	3月24日	八重山毎日	竹富町ネコ飼育条例が成立 イリオモテヤマネコ保護に大きな期待
351	2001年(H23)	3月29日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが交通事故死 昨年末から3頭が被害にあう 安全運転呼びかけ
352	2001年(H23)	3月29日	八重山日報	イリオモテヤマネコが交通事故死 昨年から3件、多発傾向

353	2001年(H13)	7月10日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのエイズ対策で西表で21日から飼い猫登録開始
354	2001年(H13)	7月19日	八重山毎日	イリオモテヤマネコが交通事故死 今年3頭目、通算で32頭にも
355	2001年(H13)	7月19日	八重山日報	イリオモテヤマネコが交通事故死 今年3件目に
356	2001年(H13)	7月22日	八重山毎日	イリオモテヤマネコエイズ感染防止作戦スタート 西表に動物診療所を設置
357	2001年(H13)	7月22日	八重山日報	九州地区獣医師連合会などが猫エイズ防止で西表島で動物診療所を開設
358	2001年(H13)	7月25日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ保護増殖事業推進協議会開く 生息域に野犬が出没
359	2001年(H13)	7月25日	八重山日報	ヤマネコの保護対策で連絡会議 精子・卵子の保存も検討へ
360	2001年(H13)	7月28日	八重山毎日	(土曜リポート) イリオモテヤマネコをネコエイズから守れ 動物診療所業務開始
361	2001年(H13)	8月28日	八重山毎日	飼いネコの登録・検査順調 西表東部で56頭を完了
362	2001年(H13)	10月5日	八重山毎日	西表島でヤマネコが交通事故死 今年に入って4件目で過去最悪
363	2001年(H13)	10月5日	八重山日報	イリオモテヤマネコ事故死 今年4件目、過去最悪
364	2001年(H13)	11月8日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ交通事故が過去最悪 非常事態を宣言 今年5頭が被害
365	2001年(H13)	11月8日	八重山日報	イリオモテヤマネコまた交通事故 今年5件目、過去最悪を更新
366	2002年(H14)	1月12日	八重山毎日	(土曜リポート) イリオモテヤマネコの交通事故が急増 昨年は過去最高
367	2002年(H14)	1月29日	八重山毎日	環境省がヤマネコ事故防止キャンペーン 講演会も開催
368	2002年(H14)	2月15日	八重山毎日	ヤマネコ事故防止キャンペーンで標識周辺をボランティアが清掃
369	2002年(H14)	2月23日	八重山毎日	〈誘い〉 ヤマネコ観察会「僕らはヤマネコ探偵団」生態調査を体験してみませんか
370	2002年(H14)	4月1日	八重山日報	ヤマネコ守るエコロード 県道路整備で小動物通過用のトンネル設置
371	2002年(H14)	6月19日	八重山日報	西表古見の県道上ヤマネコが事故死 今年に入り初めて
372	2002年(H14)	6月19日	八重山毎日	ヤマネコが交通事故死 78年以降、35頭が被害に
373	2002年(H14)	10月25日	八重山毎日	ヤマネコ保護増殖事業推進連絡会議が行なわれた オオヒキガエル定着の恐れ高い
374	2002年(H14)	10月25日	八重山日報	ヤマネコ保護増殖事業推進連絡会議が行なわれ関係機関が保護事業を報告
375	2002年(H14)	12月22日	八重山日報	イリオモテヤマネコを交通事故から守ろう 環境省が事故防止キャンペーン
376	2002年(H14)	12月23日	八重山毎日	「イリオモテヤマネコに注意を」交通事故防止で看板周辺を清掃
377	2002年(H14)	12月29日	八重山毎日	〈誘い〉 イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン ヤマネコ観察会
378	2003年(H15)	1月12日	八重山毎日	西表島でイリオモテヤマネコの生態を学ぶ観察会を行なう
379	2003年(H15)	1月15日	八重山日報	イリオモテヤマネコの生態を学ぶ 親子連れなどが観察会
380	2003年(H15)	5月15日	八重山毎日	ヤマネコが交通事故死 78年以降36件目・夜間はスピード落として
381	2003年(H15)	5月15日	八重山日報	イリオモテヤマネコが交通事故死
382	2004年(H16)	1月21日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの交通事故防止で注意標識周辺を清掃
383	2004年(H16)	1月21日	八重山日報	「イリオモテヤマネコを守れ」交通事故防止で標識を清掃
384	2004年(H16)	2月6日	八重山毎日	〈やまねこ観察会、生態調査を体験してみませんか〉
385	2004年(H16)	3月3日	八重山毎日	ヤマネコ交通事故防止標語で3点の入賞作品決まる
386	2004年(H16)	3月6日	八重山日報	やまねこ交通事故防止標語で加治木さんが最優秀賞
387	2004年(H16)	3月16日	八重山毎日	（期間中5年ぶり無事故記録）イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン
388	2004年(H16)	4月24日	八重山毎日	（土曜リポート）イリオモテヤマネコ交通事故防止で設置の「猫ボックス」効果検証
389	2004年(H16)	4月26日	八重山毎日	交通事故に遭ったイリオモテヤマネコ、8年目に入ったリハビリ生活
390	2004年(H16)	5月2日	八重山毎日	イリオモテヤマネコ発見にも尽力の動物文学の戸川幸夫氏死去
391	2004年(H16)	6月27日	八重山日報	イリオモテヤマネコ保護増殖会議で「エコロード」の現状などを報告
392	2004年(H16)	10月31日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの交通事故防止でキャンペーンが明日から行なわれる
393	2004年(H16)	11月3日	八重山日報	「イリオモテヤマネコを守れ」交通事故防止キャンペーンを展開
394	2004年(H16)	12月1日	八重山毎日	イリオモテヤマネコがまた交通事故、これで39頭目
395	2004年(H16)	12月1日	八重山日報	交通事故で負傷のイリオモテヤマネコが今年初めて死亡
396	2004年(H16)	12月7日	八重山毎日	野生生物保護対策検討会でイリオモテヤマネコの生息頭数再調査を提言
397	2005年(H17)	2月5日	八重山毎日	環境省はイリオモテヤマネコの生息を脅かす野ネコ76頭を捕獲
398	2005年(H17)	2月9日	八重山毎日	「ヤマネコ 再び輪禍？」環境省は足にケガをしているヤマネコの目撃情報を呼びかけ
399	2005年(H17)	2月9日	八重山日報	環境省はケガを負ったヤマネコの情報を呼びかけ
400	2005年(H17)	2月16日	八重山日報	20日のイリオモテヤマネコ調査体験観察会が行なわれる
401	2005年(H17)	2月17日	八重山毎日	〈イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン〉僕らはヤマネコ探偵団05
402	2005年(H17)	2月21日	八重山毎日	ヤマネコ調査体験観察会で児童らが多数参加しヤマネコの食生活を学ぶ
403	2005年(H17)	4月27日	八重山毎日	イリオモテヤマネコがまた交通事故で死亡
404	2005年(H17)	4月30日	八重山毎日	（土曜リポート）イリオモテヤマネコの生息100頭前後か、生存脅かす
405	2005年(H17)	8月9日	八重山毎日	イリオモテヤマネコのえさは76種類、世界で類を見ない多様な捕食
406	2005年(H17)	10月7日	八重山毎日	環境省はヤマネコへの猫エイズ感染対策で本年度もノネコ捕獲へ
407	2005年(H17)	10月19日	八重山毎日	環境省はイリオモテヤマネコの第4次生息調査へ
408	2005年(H17)	10月19日	八重山日報	環境省は今年度からイリオモテヤマネコの生息状況を調査
409	2005年(H17)	12月12日	八重山毎日	ヤマネコ保護で九州獣医師会が西表西部動物診療所を開設
410	2005年(H17)	12月18日	八重山毎日	イリオモテヤマネコの調査で保護増殖分科会は環境悪化で生息頭数がさらに減と報告
411	2005年(H17)	12月18日	八重山毎日	野生生物保護センターの開館10周年記念展でヤマネコ脅かす事故などを解説
412	2006年(H18)	2月16日	八重山毎日	環境省は19日にヤマネコ調査体験観察会を開く
413	2006年(H18)	2月17日	八重山毎日	〈イリオモテヤマネコ交通事故防止キャンペーン〉生態調査を体験してみませんか
414	2006年(H18)	6月21日	八重山毎日	西表ヤマネコが交通事故死 累計で41件目

※阪口法明・宮城邦治・西平守孝 「イリオモテヤマネコに関する文献目録」『沖縄島嶼研究7号』

参照。

## 2015年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書（発行年、編著者）	寄贈者芳名
アーカイブズ ARCHIVES 沖縄県公文書館だより 第48号・49号 (2015年、沖縄県文化振興会)	沖縄県文化振興会
アメリカ・エスニック紀行—沖縄記者の大陸感情ルボ1990— (2010年、三木健)	三木健
綾道 平良北コース (2014年、宮古島市教育委員会)	宮古島市教育委員会
生き続ける琉球の村落—沖縄の村落観を問い合わせなおす—(第2回学際シンポジウム) (2015年、鎌田誠史編)	浦山隆一、鎌田誠史
石垣市史 各論編 考古 (2015年、石垣市教育委員会市史編集課)	石垣市教育委員会市史編集課
石垣市文化協会創立二十周年記念誌 あやばに (2015年、創立二十周年記念誌編集委員会)	石垣市文化協会
石垣仲筋会創立50周年記念誌 踊雙鯉 (2015年、石垣仲筋会創立50周年記念誌編集委員会)	石垣仲筋会、松島昭司
浦添市移民史 本編 (2015年、浦添市教育委員会)	浦添市立図書館
沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法〔法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』(33号)【抜刷】〕 (2009年、金田章宏)	飯田泰彦
沖縄研究資料30 楚南家文書「呈稟文集」 (2015年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
沖縄県史 資料編24 自然環境新聞資料 (CD-ROM版) (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史 資料編25 女性史新聞資料 大正・昭和戦前編 女性史2 (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史 資料編25 女性史新聞資料 大正・昭和戦前編 (CD-ROM版) (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史 各論編 第1巻 自然環境 (CD-ROM版) (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県史 各論編 第1巻 自然環境 (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄県地域史協議会会誌 第38号 (2015年、沖縄県地域史協議会編)	沖縄県地域史協議会
沖縄県の戦争遺跡 (2015年、沖縄県立埋蔵文化財センター)	沖縄県立埋蔵文化財センター
沖縄県公文書館研究紀要 第17号 (2015年、沖縄県文化振興会)	沖縄県文化振興会
沖縄県立芸術大学移動大学 in たらま 一平成24年度 沖縄県立芸術大学研究支援資金 「移動大学を通じた地域貢献に関する研究」報告書—	沖縄県立芸術大学附属研究所
沖縄県立芸術大学移動大学 in 久米島 平成25年度 報告書	沖縄県立芸術大学附属研究所

沖縄県立芸術大学移動大学 in 伊良部島 平成26年度 報告書	沖縄県立芸術大学附属研究所
沖縄戦70年記念朗読劇 アンガマ異聞 一石垣島いくさ世一 (台本) (2015年、栗原省)	玉城功一、八重山戦争マラリアを語り継ぐ会
沖縄文化研究41 (2015年、法政大学沖縄文化研究所編)	法政大学沖縄文化研究所
沖縄文化研究42 (2015年、法政大学沖縄文化研究所編)	法政大学沖縄文化研究所
沖縄史料編集紀要 第38号 (2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
沖縄史料編集紀要 第37号 (2014年、沖縄県教育委員会)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
沖縄資料ガイドブック～データベース紹介と職員コラム～ 琉大史跡編 (2015年、琉球大学附属図書館情報サービス課 情報サービス企画係 沖縄資料担当)	琉球大学附属図書館
沖縄戦関係古書籍目録 (2015年、榕樹書林)	榕樹書林
沖縄の思潮 第2巻第1号 (通巻第7号) (1978年、あけぼの印刷)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
沖縄県地域史協議会 2014年度研修会 (2015年、富山国際大学現代社会学部)	有明工業高等専門学校
沖縄問題研究シリーズ第79号 シマグワあれこれ (1984年、沖縄協会)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
沖縄 こころの軌跡 (1987年、マルジュ社)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
おきなわの宿 (1975年、沖縄県観光連盟)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
恩納間切地図 村地籍図等資料 (2015年、恩納村博物館)	恩納村誌編さん室
ガイドブック宮古南静園 (2015年、国立療養所宮古南静園入園者自治会)	沖縄県地域史協議会
菊と刀 (1973年、長谷川松治訳)	通事孝作
来夏世 一祈りの島々 八重山一 (2013年、大森一也)	大森一也
源遠流長 一八重山高校第10期生会喜寿記念誌一 (2015年、喜寿記念誌編集委員会委員長前木秀裕)	石垣久雄、八重山高校第10期生会
幻想の街・那霸 (1986年、新宿書房)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
国立劇場おきなわステージガイド 華風 (2012年1月号、3月号、12月号、2013年1月号、9月号、10月号、11月号、12月号、2014年2月号、3月号、6月号) (11冊) (各年、国立劇場おきなわ運営財団)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
古典語・共通語と琉球方言との比較研究の方法序説—その最も素朴な出発点— (1969年、琉球大学〈法文学部紀要人文篇第13号抜刷〉)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
島の文化誌 島たや vol.3 (2008年、クイチャーバラダイス友の会)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
首里城研究 No.17 (2015年、首里城研究会編)	首里城公園友の会
資料集 啜木と沖縄—近代短歌史の思い出— (沖縄啄木同好会)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
知床博物館研究報告 第37集 (2015年、内田暁友編)	斜里町立知床博物館

新大宜味村史 戦争証言集 渡し番—語り継ぐ戦場の記憶— (2015年、大宜味村史編纂委員会)	大宜味村史編纂室
図でみる竹富町の農業と漁業 (1988年、沖縄農林水産統計情報協会)	竹富町建設課
成果報告展「日系二世が見た戦中・戦後」～母国と祖国の間で～ (2015年、沖縄県平和祈念資料館)	沖縄県平和祈念資料館
戦後北谷の保健福祉のあゆみ図録 一平成26年度北谷町公文書館企画展— (2015年、北谷町公文書館)	北谷町公文書館
創立五十周年記念誌 翔ばたかん大空へ (1999年、竹富町立波照間中学校)	竹富町立波照間中学校
第一音楽紀行 (上) (下) 〈2冊〉 (1999年、県立図書館マイクロ複製本)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
第3回 綾羽 (カンムリワシの幼鳥) 顔写真調査報告書 (2012年、カンムリワシリサーチ)	飯田泰彦
竹富町の畜産 (1991年、竹富町経済課)	竹富町建設課
地方史情報 123 (2015年、岩田書院)	岩田書院
地域開発 No.214 (1982年、日本地域開発センター)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
地理歴史人類学論集 第3号 (2012年、琉球大学法文学部)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
東海大学学園史ニュース No.10 (2015年、東海大学学園史資料センター)	東海大学学園史資料センター
東海大学七十五年年史編纂だより 第2号 (2015年、橋本敏明編)	東海大学学園史資料センター
図書目録2015 (2015年、岩田書院)	岩田書院
豊見城史だより 第12号 (2015年、豊見城市教育委員会生涯学習部文化課)	豊見城市史
中琉歴史關係當案 道光朝 (一) (2015年、中国第一歴史當案館)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
中琉歴史關係當案 道光朝 (二) (2015年、中国第一歴史當案館)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
中琉歴史關係當案 道光朝 (九) (2015年、中国第一歴史當案館)	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
那覇港の昔と今—泊大橋開通記念展より— (1986年、沖縄開発庁沖縄総合事務局那覇港工事事務所編)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
南海山桃林寺開山四〇〇年大祭記念誌 法燈連綿 (2015年、記念誌編集委員会)	吉川英治、臨濟宗妙心寺南海山桃林寺開山四〇〇年大祭記念事業奉賛会
南西諸島の天然水 (2015年、ボーダーイング)	東田 盛善
南島文化研究所所報 第60号 (2015年、沖縄国際大学南東文化研究所)	沖縄国際大学
南島文化 第37号 (2015年、沖縄国際大学南東文化研究所)	沖縄国際大学
南島市民講座 ミルク世界報と長者の大主鑑賞会 (1983年、沖縄国際大学、琉球新報社、沖縄県)	沖縄県立図書館 (譲渡会)
平成19年度教育計画 竹富町立波照間中学校	竹富町立波照間中学校

平成26年度恩納村誌編さん室だより（第36号～41号）（2015年、恩納村誌編さん室）	恩納村誌編さん室
水調査報告書（1968年、琉球政府）	沖縄県立図書館（譲渡会）
宮古島市の文化財（2011年、宮古島市教育委員会）	宮古島市教育委員会
昔の那覇と私（1986年、若夏社）	沖縄県立図書館（譲渡会）
モモト vol25（2015年、東洋企画）	アント出版
八重瀬町の歴史（概要版）（2015年、八重瀬町史編集委員会）	八重瀬町史編集委員会
八重瀬まちあるきぶっく（2015年、八重瀬町教育委員会）	八重瀬町史編集委員会
八重山西表島（祖納）方言動詞の活用タイプ〔法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』（35号）〔抜刷〕〕（2011年、金田章宏）	飯田泰彦
八重山の気象と自然暦（1986年、大仲浩夫）	竹富町建設課
八重山の歴史と文化・自然（2015年、八重山の歴史と文化・自然編集委員会編著）	石垣市教育委員会
八重山植物の研究 I～III（1977年、天野鉄夫）	沖縄県立図書館（譲渡会）
八重山諸島における開拓移住行政の推移と移住地の実態分析（1978年、沖縄国際大学）	沖縄県立図書館（譲渡会）
八重山歌工工四編纂百周年記念誌 あけぼ乃（1987年、記念事業期成会）	沖縄県立図書館（譲渡会）
与那原町史だより第7号（2015年、与那原町教育委員会 生涯学習振興課）	与那原町史編纂室
よのづち 浦添市文化部紀要 第10号（2014年、浦添市教育委員会）	浦添市立図書館
よのづち 浦添市文化部紀要 第11号（2015年、浦添市教育委員会）	浦添市立図書館
立正大学人文科研究所年報 第52号（2014年、吉岡雅光編）	島村幸一
立正大学大学院紀要 第31号（2015年、立正大学大学院紀要編集委員編）	島村幸一
立正大学文学部研究紀要 №31（2015年、齊藤昇編）	島村幸一
琉球のことばの書き方（2015年、くろしお出版）	麻生 玲子
琉球の方言39（2015年、沖縄文化研究所）	法政大学沖縄文化研究所
歴代宝案 訳注本 第12冊（2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
歴代宝案編集参考資料14 『歴代宝案』訳注本第12冊 語注一覧表（2015年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班
AKAMATA №11（1995年、沖縄両生爬虫類研究会）	沖縄県立図書館（譲渡会）
DVD「西表正治さん享年96歳 追悼ビデオ—生涯を由布島と共に—」（映像工場）	飯田泰彦

# 竹富町史編集係 2015年度 業務日誌

- 4月1日 年度始め式  
辞令交付式
- 4月3日 『竹富町史第六巻鳩間島』を町内小中学校へ寄贈
- 4月6日 山田書店、BOOKSじのん、榕樹書林、NPOたきどうん、沖縄教販、南山舎、喜宝院
- 4月7日 竹富町商工会、南島民俗資料館と委託販売契約を交わす  
美崎運輸倉庫を整理
- 4月17日 第8回波照間島編専門部会
- 4月22日 玻座真 武氏、本成 尚氏と黒島編打ち合わせ
- 4月23日 美崎運輸倉庫を整理
- 4月23日 石垣 繁氏に『竹富町史第七巻波照間島』第7章第1節「言語」の執筆依頼
- 4月27日 『八重山日報』に得能壽美氏の書評「鳩間島①」掲載
- 4月29日 『八重山日報』に得能壽美氏の書評「鳩間島②」掲載
- 5月11日 台風6号12時30分に暴風警報発令
- 5月22日 第9回波照間島編専門部会 西前津松一氏に委嘱状交付
- 5月28日 2015年沖縄県地域史協議会（今帰仁村）に職員1人参加
- 6月1日 『八重山毎日新聞』に照屋 理氏の書評「鳩間島」掲載
- 6月2日 竹富島コンドイリゾート試掘調査に職員1人協力依頼（～5日）
- 6月6日 『沖縄タイムス』に波照間永吉氏の書評「鳩間島」掲載
- 6月15日 第10回波照間島編専門部会 島村賢正氏に委嘱状交付
- 7月2日 竹富町制施行67周年
- 7月6日 西表西部調理場の引越し作業に職員1人派遣
- 7月9日 台風9号16:09に暴風警報発令
- 7月10日 業務停止命令
- 7月19日 『琉球新報』に赤嶺政信の書評「鳩間島」掲載
- 7月23日 第11回波照間島編専門部会
- 8月4日 石垣久雄（町史編集委員長）、玉城功一（波照間島編専門部会部長）連名で竹富町長川満栄長宛に「人物調査」依頼
- 8月13日 第8回ぱいぬ島まつりに職員3名が派遣（～16日）
- 8月23日 台風15号が襲来 竹富町役場が停電
- 8月24日 予定されていた第12回波照間島編専門部会が9月8日に延期
- 9月8日 第12回波照間島編専門部会
- 9月21日 台風21号のため業務停止命令
- 9月24日 『竹富町史第七巻波照間島』原稿〆切
- 9月30日 慶田盛安三教育長退任激励式
- 10月1日 大田綾子教育長が就任

- 10月 6日 第13回波照間島編専門部会
- 10月16日 与那国交流館研修に職員1人を講師に派遣
- 10月28日 第14回波照間島編専門部会
- 10月29日 2015年沖縄県地域史協議会（宮古島市）職員1人参加
- 10月30日 石垣久雄（町史編集委員長）、玉城功一（波照間島編専門部会部長）連名で竹富町長川満栄長宛に「人物調査」依頼
- 11月 5日 八島印刷へ『竹富町史だより』をB5版からA4版に変更の見積りを依頼
- 11月29日 役場の位置についての住民投票
- 12月 4日 第33回竹富町史編集委員会を開催
- 12月12日 「西表島編」原稿〆切
- 12月22日 波照間島のミョウクチエに職員1人参加
- 12月28日 平成27年仕事納め式
- 1月 4日 平成28年仕事初め式
- 1月20日 小濱正貞氏より、小濱家蔵の板証文5枚と急須の管理についての「委託状」（竹富町教育委員会宛）を受理する。
- 2月 5日 沖縄県立図書館の郷土複本譲渡会に職員1人出席
- 2月 6日 加治工真市氏と「言語編」の基本構想会議
- 2月 8日 黒島旧正月に職員1人視察
- 2月13日 第23回やまねこマラソン大会に職員1人派遣



イリオモテヤマネコ発見50年を記念して、大自然の象徴であるヤマネコの保全を推進するとともに、未来に向けてヤマネコと共生しながら地域を発展させる機運を内外で高めるなど、より多くの人たちに関心をもってもらうため、一般公募により選出されたロゴマーク

沖縄県宮古島市在住 松本美紀子さんの作品

## 【資料紹介】波照間小学校治革誌

「波照間小学校治革誌」は学校生活のみならず、波照間島の暮らしをも記録した貴重な資料である。特にアジア・太平洋戦争以前の島の歴史を補完する資料として大いに活用したいものである。

というわけで、竹富町史編集事業として、「波照間島小学校治革誌」を近代資料と位置づけ、二〇〇八年（平成二〇）に波照間小学校から許可を得て、「竹富町史 第十巻 資料編近代5 一 波照間島近代資料集」（竹富町、二〇〇九年、以後「近代5」と略記）に、学校創立の一八九四年（明治二十七）から、アジア・太平洋戦争を経て、一九四八年（昭和二十三）三月三一日までを収録した経緯がある。「近代5」は、墨書きされた原本をデジタル撮影したままを掲載しているため、一般読者には読みづらい箇所もみられる。

本稿は、読者の便宜を図り、「近代5」に収録された期間のうち、創立から一九二六年（大正十五）を活字化したものである。翻字は上地みどり（竹富町史編集係）が行ない、難読文字や疑問点があることに、波照間島編専門部会、竹富町史編集係で十分に協議し、ときには波照間小学校に協力を願い、解決したものである。

なお、原本の記述を尊重し、なるべく旧漢字もそのまま用いることにした。また、判読不明の文字は、その字数分だけ■としたことを、予め断つておく。その他、注記が必要である箇所については、通し番号を付し文末に示すことにした。

- 漸ク一坪ニシテ在籍生徒數五 ■ (\*1) 號ヲ以テ坪ニ付五人ニ分ノ割ナリ其上一般ノ ■ 尋心ナキ故教育ノ効果容易ニ奏スルコト得ザリキ
- 一、教科目ハ明治二十三年発布ノ小學校令ニ依リテ教授シ學具ノ一切ヲ貸與シ居シリ
  - 一、明治廿八年四月十八名新ニ就學セシム
  - 一、全廿九年十二人ノ新入學生アリ
  - 一、全卅年四月一日當校舎不完全且ツ狹隘ニナルヲ以テ事務所ノ東方なる村有地ニ校舎改築シ移轉ス
  - 一、全三十一年三月第一回卒業生十一人ヲ出シ新入學生八人アリ
  - 一、全三十一年三月三十八人ノ卒業生ヲ出シ十九人ノ新入學生アリ
  - 一、全三十三年三月三人ノ卒業ヲ出シ新入學生十八人アリ之ヲニ學級ニ編制ス
  - 一、全年八月十八日勅令三百四十號ヲ以テ小學校令ヲ改正發布セフレ、全年五月廿三日ヲ以テ文部省令第十四號ヲ以テ小學校令施行規則ヲ發布セラル
  - 一、全年三十四年三月十七日沖縄縣令第九號ヲ以テ小學校ニ關スル規定ヲ發布セラル
  - 一、全年四月一日訓導黒島孫操代用教員大濱政傳当校勤務ヲ命セラル

- 一、全年三月六人ノ卒業生ヲ出■二十人ノ新入學生アリ
- 一、全年四月三日校名ヲ大川尋常小學校波照間分教場ト改称ス
- 一、全卅五年三月四人ノ卒業生ヲ出シ十九人ノ新入學生アリ
- 一、全三十六年三月七人ノ卒業生ヲ出シ新■二十一人ノ兒童ヲ就学セシム
- 一、全三十六年四月文部省令第二十二號ヲ以テ小學校令施行規則中教科用圖書採定ニ関スル規定ヲ改正セラル
- 一、全卅七年三月六人ノ卒業ヲ出シ十八人ノ新入學生アリ
- 一、全三十八年三月第八回ノ卒業生六人ヲ出入今回初メテ高等小學校二式人入學セシメタリ
- 一、全年七月訓導黒島孫摸ハ西表分教場二代用教員大濱改傳ハ崎山分校ニ各々轉任ヲ命セラル
- 一、全年八月其后任准訓導宮良長庸代用教員伊舍堂孫意當校勤務ヲ命セラル
- 一、全卅九年三月十一人ノ卒業生ヲ出シ廿三人ノ就学生アリ
- 一、全年四月校舎並ニ運動場ノ不完全且ツ狹隘ノ為メ当事務所ノ北方ナル地ニ校舎ヲ改築シ移轉ノ式ヲ挙グ
- 一、全年五月新ニ十七日本縣令二十號ヲ以テ八重山郡學區域ヲ改定セラレ波照間尋常小學校ト改称セラル
- 一、全年五月訓導新垣信永當校長ヲ命セラル
- 一、全年五月准訓導宮良長庸竹富尋常小學校ニ轉任ヲ命セラル
- 一、全四十年三月廿六人ノ卒業生ヲ出シ廿四人ノ新入學生アリ
- 一、全年四月新垣校長依願退職
- 一、全年全月訓導波照間永彥其后任ヲ命セラル
- 一、全年全月准訓導宮良長庸代用教員崎山用貴當校勤務ヲ命セラル
- 一、目下在籍生徒数百四十三人トナル依ツテ三學級編制ス
- 一、全年三月廿一日勅令第五十四號ヲ以テ義務教育年限ノ延長即尋常小學校ヲ六ヶ年ト定メラル
- 一、全年九月波照間校長大川尋常小學校ニ轉任其后任訓導太外元八大川尋常小學校ヨリ全年九月廿七日付ヲ以テ當校長ニ轉任ヲ命セラル
- 一、全四十一年三月代用教員崎山用貴依願退職
- 一、全年三月十四人ノ卒業ヲ出シ十六人ヲ就学セシム
- 一、全年四月代用教員崎山用佰當校勤務命セラル
- 一、明治四十二年四月八日宮良准訓導ニハ依願退職ヲ命セラル
- 一、明治四十二年四月八日白保尋常小學校准訓導神山朝祥氏波照間尋常小學校准訓導ヲ命セラル
- 一、明治四十二年四月十二日崎山代用教員ニハ學級編制ノ都合ニヨリ職務ヲ解カレ其後任ニ喜友名マハツ子代用教員ヲ命セラル
- 一、明治四十二年四月一日新入學生武拾武名内男拾壹人女拾壹人  
右男ノ内壹人ハ病氣ニ付猶豫ス

- 一、明治四十二年八月 代用教員喜友名マハツ (\*2) 依願退職
- 一、全年九月四日石垣用房當校代用教員二任セラル
- 一、全年十月二十六日校長太外元宮古郡砂川尋常小學校訓導二傳任ス
- 一、明治四十二年十二月廿七日八重山高等小學校代用教員大濱保武當校訓導兼校長二任セラル
- 一、明治四十三年三月三十一日 代用教員石垣用房依願退職
- 一、明治四十三年四月一日 新入學兒童 男七名 女九名 計十六
- 一、全年全月今日ヨリ改正ノ國定教科書使用  
但シ修身書、六年地理歴史ハ從前ノモノ襲用 國語假名遣改正復舊ス。
- 一、全年全月 日 宮良尋常小學校代用教員牧志ウト (\*3) 當校代用教員に任命セラル
- 一、全年九月廿七日准訓導神山長祥依願退職
- 一、全年同月十日 新城阿良加當校代用教員二任命セラル
- 一、明治四十四年三月廿六日義務教育年限延長後第一回ノ卒業者男拾參名女八名計貳拾壹名ヲ  
出ス
- 一、明治四十四年四月一日新入學兒童  
男十七名 女五名 計廿二名  
内一名猶豫、一名免除
- 一、全年全月 當校卒業男五名女二名計七名ヲ勸誘シテ登野城高等小學校二入學セシム
- 一、全年全月一日ヨリ第六學年用改正ノ地理書歴史書使用  
全年 初頃ヨリ南北朝正閏問題ノ論 ■盛ニ一起り其ノ教授ニ就キ文部省ヨリ注意訓令アリ其結果第五 學年用歴史書教師用ハ廢棄トナリ兒童用書ニモ修正ヲ加ヘラル
- 全年三月三十一日 教員加俸令改正セラル
- 全年十月三十日 小學校令中ノ一部分改正セラレ各道府縣小學校長中ニテ三人マテヲ奏任待遇  
トナス コトヲ得セシム
- 全四十五年三月廿五日 新城阿良加當校准訓導二命セラル
- 全年三月廿九日 卒業兒童 男十二名 女十二名
- 全年四月 新入学兒童 男十二名 女七名
- 全年全月 父兄ニ勸誘シテ卒業石野與利ヲ登野城高等小學校ニ田福加那加屋本與利ヲ農業補習  
學校ニ入学セシム
- 全年七月 明治天皇御不列全月三十日崩御  
其際國民万機ケタル熱誠ハ國民教育ノ上ニ偉大ナル感化ヲ與ヘタリ
- 全年 七月三十日 今上天皇陛下御踐祚アラセラレ元ヲ改メテ大正ト称セラル
- 大正元年九月八日 代用教員牧志ウト依願退職
- 全年九月十二日 金城永明當校代用教員二命セラル
- 全二年三月廿三日 代用教員金城永明ハ学級編制ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラル
- 全年三月廿七日 卒業兒童 男十四名 女十名

全年四月一日 従來ノ三學級編制ヲ二學級編制トナス

新入学兒童 男十四 女十五

全屏四月十五日 執訓導新城阿良加當校訓導ニ任ゼラル

明治天皇崩御今上天皇陛下御践祚ノ御事實ニ基キ修正セラレタル讀本、歴史書

ノモニ用ノ

大観風足引交會貴到シテ校具ノ大部分破損セラレ授業休止ノ已ムナキニ至ル

一九三二年一月一日《民主》勞力書局印行

大清光緒三十二年十一月十九日 送葬見道 男八名 女五名

二年正月廿二日行公事日曆男八名女十二名

明嘉靖二年正月廿二日清耶行些、耶歲年、明事賈二基牛修王勿加

明治天皇崩御後、御靈寶殿にて、是役に専任不

今年三月廿五日  
核長大溝保路ノ重山群石塊等付小是林言定一軒付

全年全月全日 八重山郡西表尋常小學校訓導兼校長沙呂タガ村官林語通事林士吉

全年四月十二日 照憲皇后陛下崩御

全年五月廿四日 照憲皇太后陛下御大

白良尋常小學校訓導兼校長二轉任又

校訓導兼校長花城直俊本校訓導兼校長二任セラレ六給下俸給與

本學年二學期ヨリ學級編制ヲ左ノ通り変更セリ

大正三年十月十三日 午前九時詔書奉讀式舉行ノ

癸卯十一月三十日 乙未前九時教育勅語俸讀式舉行入

全年十月三十一日 天長節祝日ハ諒闇中二付祝賀式宴會等舉行スルニ及バザル義仰出サレタリ

二十九

六月三日一早，京閩中二村羣氏舉行也。

全年三月二十一日 午前十時より修業證書並卒業證書授與式舉行ス來賓二八當字平原駐在巡査  
醫師及有志者、児童父兄等百數十人ナリ式終了後卒業生二對ノ茶話會ヲ開キ將來ヲ訓話セリ  
本學年卒業児童男八女九ニシテ修業児童百十人ニ不合格生一人ナリキ

全年四月一日入學式及始業式ヲ舉行ス

新入学児童 男一〇 女一五

本學年度學級編制左通り定メタリ

二	一	學級		學年		在籍児童 計	職名	氏名
		第一學年	第四學年	男	女			
第六學年	第五學年	一五	一八	一〇	一四	六四	訓導	阿良加
第六學年	第三學年	一五	一五	一三	一四	*4	校長	花城直俊
第六學年	第二學年	一五	一七	一七	一四	七四	導權	新城直俊

全年五月四日付 黒島秀本校代用教員任命セラレ月俸參円給與、六月九日赴任就職

大正四年九月十六日 校舎建築ノタヌ事務所ノ敷地ニ假校舎ニ二棟建テ當分此ニテ教授ヲナス

大正四年十一月十日 今上陛下御即位ノ大禮ヲ行ハセ給フニ付キ當校ニ於テモ齋戒沐浴ノ上在  
鄉軍人及び一般人民ト共ニ謹嚴ナル式ヲ舉ゲタリ

全年全月十四日 大嘗會行ハセラル

全年十二月十八日 建築中ノ校舎竣工シタルヲ以テ新校舎ニ移ル、總坪数五十五坪七合五勺

大正五年二月十一日教育ニ関スル御沙汰書俸讀式ヲ舉グ

全年四月一日 卒業式舉行 卒業生 男六人 女八人 計十四人 男一人ハ高等小學校ニ入學  
シタリ

全年四月四日 入學式ヲ舉グ 新入児童 男十六人 女十四人

全年四月十七日 訓導兼校長花城直俊ハ三月二十二日付小學校令施行規則第百二十二條第二號  
ニ依リ休職ヲ命セラル

與那國尋常小學校訓導稻嶋盛真大正五年四月十八日付ヲ以テ當校訓導兼校長ニ任セラル

全年五月十五日赴任

本學年度ヨリ從來ニ學級ノ處ニ學級ニ編制シ左ノ通り担任ス

		學級		學年		在籍兒童數	計	職名	氏名
				第一學年	第二學年				
三	二	一八	一三	男	女				
	一	一八	一五						
四	三	一〇	一八						
	二	一〇	一三	男	女				
五	四	一四	一七	男	女				
	三	一四	一四	男	女				
六	五	一四	一四	男	女				
	四	一四	一四	男	女				
						七四		計	

全日

左ノ三先生當校へ任命セラル

准訓導 伊志嶺安甫氏

代用教員 宮良當昌氏

全 生盛 末氏

大正十四年四月一日

當校ニ高等科併置サレ 男二二 女七 計二九人ノ入學者アリ

全年五月二十五日

休職国頭郡謝花小學校訓導富川盛正氏

當校訓導兼校長ニ任命

全年九月九日

高等科併置式盛大ニ舉行サル

大正十五年三月二十八日

増級二伴フ校舎ノ狹隘ノタヌ假校舎一棟(四二坪 茅葺獨立小屋)字寄附ニヨツテ建ツ。

全年三月三十一日

宮良質貞氏代用教員トシテ當校へ任命

大正十五年十一月代用教員宮良當昌依願退職

全年十一月

代用教員波名城長好來任

\*1 「六」か。

\*2 前出では「喜友名マハツ子」とある。

\*3 波照間小中学校からの情報より「牧志」とした。

\*4 計算すると六八になるが、原本のままとした。

\*5 大正のこと。「歴代教職員名簿」(創立百周年記念誌『波の子』竹富町立波照間小学校、一九九五年)三二七頁にて確認。

\*6 「」内の記事について、原本に錯簡が認められるので、年代順に示した。

代謝

十五日

## 竹富町史の刊行物一覧

No.	書籍名	発行年度	税抜価格
1	竹富町関係文献目録	1990年度	—
2	竹富町史 別巻③ 写真集「ぱいぬしまじま」	1992年度	¥2,500
3	竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」	2004年度	¥2,500
4	竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」	2001年度	¥2,500
5	竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」	2005年度	¥2,500
6	竹富町史 第十巻 資料編「近代4－官報にみる八重山」	2006年度	¥2,500
7	竹富町史 第十巻 資料編「近代5－波照間島近代資料集」	2009年度	¥2,500
8	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」	1993年度	¥2,000
9	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」	1994年度	¥2,000
10	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」	1996年度	¥2,000
11	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅳ」	2000年度	¥2,000
12	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅴ」	2002年度	¥2,000
13	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅵ」	2003年度	¥2,000
14	竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」	1995年度	¥3,000
15	竹富町制施行50周年記念誌 「ぱいぬしまじま50」	1998年度	¥2,500
16	竹富町史 資料集① 「鉄田義司日記」	1999年度	—
17	竹富町史 第二巻 竹富島	2011年度	¥3,000
18	竹富町史 第三巻 小浜島	2011年度	¥3,000
19	竹富町史 第五巻 新城島	2013年度	¥3,000
20	竹富町史 第六巻 鳩間島	2014年度	¥3,000

## 編集後記

本号より『町史だより』の体裁を一新しました。大きさをB5サイズからA4サイズに、文章を縦書きから横書きにし、頁数を増量しました。これを契機として、町民をはじめ、編集委員の先生方、竹富町出身の方々を中心に『町史だより』の紙面を提供いたします。これまでの体験や調査などを、『町史だより』の紙面でご教示願いたく存じます。

また、ちょっとしたエピソードでも気軽に寄せいただきたいものです。歴史はこのようなエピソードの積み重ねによって築かれるものでしょう。その他、過去の新聞記事を島の内側からの視点で検証することも有意義であることかと思います。

そのために、収蔵資料を整理し、町史編集係からもどんどん情報提供していきたく存じます。とりわけ、今回は『竹富町史 第七巻 波照間島』の編集中ということもあり、「波照間島に関する資料」目録と、「波照間小学校沿革誌」などを整理しました。また、昨年はイリオモテヤマネコ発見50周年という話題もあり、その経過を確認する意味でも「イリオモテヤマネコ新聞記事表題一覧」を供することにしました。

歴史を軽んじる者に未来はありません。竹富町の未来を明るく照らす「竹富町史」を皆さんと一緒に編んでいきたいと思います。尚、原稿の投稿や問い合わせについては奥付のメールアドレスまでお願いします。

2016年3月31日発行

竹富町史だより

第37号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-82-6191

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp